

---

学位論文

優位性の観点から見る「マア」  
—出現条件と音声的特徴に着目して—

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 日本語教育学分野  
馮 文彦

---

## 目次

### 第1章 序論

1.1 本研究の目的と研究対象	2
1.2 論文の構成	4

### 第2章 研究の背景

2.1 はじめに	6
2.2 フィラーについての先行研究	6
2.3 「マア」を対象とする先行研究	9
2.3.1 情報の独占	9
2.3.2 「曖昧性」	11
2.3.3 心内の「わだかまり」	12
2.3.4 他の選択可能性	13
2.4 研究課題	14

### 第3章 「マア」の出現条件の仮説

3.1 立場的優位性	17
3.2 視点の優位性	19
3.3 情動的優位性	23
3.4 本章のまとめと「マア」の出現条件の仮説	24

### 第4章 自然会話の用例からの検証

4.1 検証の手順	27
4.2 会話データの概要	27
4.3 自然会話の「マア」の出現傾向	28

---

4.4 大学講義の「マア」の出現傾向	45
4.5 「マア」が出現する必然性	51
第5章 「マア」の音声	
5.1 「マア」の音声的特徴	58
5.2 「マア」の音声的特徴による使い分け	75
5.2.1 延伸を伴う「まあ」	77
5.2.2 ピッチが下がらない「ま」	83
5.2.3 中間的な「まあ」	88
5.3 本章のまとめ	91
補説	92
第6章 結論	
6.1 本研究のまとめ	98
6.2 日本語教育への示唆	99
6.3 今後の課題	101
付録	
参考文献	
アンケート	

---

## 第 1 章 序論

---

## 1.1 本研究の目的と研究対象

日本語には「アノ」や「マア」のような一見意味のない表現が数多く存在している。これらの表現は「遊び言葉」「言い淀み」「無意味語」「場つなぎ語」など様々な名前と呼ばれたが、近年、このような表現はフィラーと呼ばれ、研究されている。本研究の分析対象となるのは、フィラーと呼ばれる「マア」である。<sup>1)</sup>

### 例 1-1

えー、よく、七回、八回、頑張ってきました。まいろんな景色の、授業がありまして、全国、あ、全国じゃなくて、広島県の中学校社会科の研究大会にも出ていただいて、実際の授業の様子、先生方の様子も見ていただきました。

(文系講義 A)

例 1-1 の「ま」は典型的なフィラーである。また、小出 (2007) では、例 1-2 ～例 1-6 のような「マア」は用言を修飾するもののため、フィラーではなく、副詞として扱っている。

例 1-2 このデザイン、**まあ**好きです。

例 1-3 **まあ**なんとかやっています。

例 1-4 **まあ**いいか。

例 1-5 文句を言わず、**まあ**食べてごらん。

---

<sup>1)</sup> 本研究では、先行研究の用例を引用する際、「マア」の表記は先行研究の表記をそのまま使用するが、「マア」全体を指す時もしくは「マア」の音声を問題にしない場合は「マア」と表記する。また、自然会話の録音を文字化する際、音声の特徴から「マア」を区別し、ピッチが下がって延伸を伴う「マア」は「まあ」と表記し、延伸せずピッチが下がる「マア」は「まあ」と表記し、ピッチが下がらない「マア」は「ま」と表記する。

---

例 1-6 それじゃ、**まあ**説明しよう。

(小出 2007:58)

先行研究では「マア」をフィラー、副詞などに分類することがあるが、研究者によって観点が異なり、フィラーもしくは副詞を分ける統一的な認定基準がないため、本研究では品詞の違いにこだわらず「マア」を広くとらえて分析対象とする。

ただし、例 1-7 のような「まあまあ」は、程度副詞として用法が定着しているため、本研究の主な研究対象としない。

例 1-7 あの店の料理は**まあまあ**美味しかった。

(作例)

また、例 1-8 の「マア」は感動詞とされているものである。感動詞の「マア」の用法などはすでに辞書に記載されているに加え、実際の会話では感動詞の「マア」はほとんど使用されていないため、本研究の研究対象から除外する。

例 1-8 **マア**，素敵！

(大工原 2010 : 163)

フィラーはテキスト構成や対人関係に関わる重要なものであり、「マア」はその中でも出現頻度の高いフィラーとして挙げられているが(山根 2002)、自然会話における「マア」の使用実態を明らかにしたものはほとんど見当たらない。また、「マア」の先行研究は、中心的意味(「曖昧性を示す」や「心内のわだかまりを示す」など)に注目していて、「マア」の出現条件を考察する研究もほとんど見当たらない。

さらに、個々の「マア」の発音は長さや高さが異なっているが、発音の違いによって「マア」の使用に違いがあるのかを考察したのは大工原(2010)のみである。大工原は「マア」の主な用法を「但し書き的用法」と「強調的用法」

---

に分け、「但し書き的用法」は高低の発音パターンなのに対し、「強調的用法」は低高の発音パターンになると述べている。しかし、実際の会話では、低高パターンの「強調的用法」はほとんど見られず、「マア」の音声的特徴も十分に研究されているとは言い難い。さらに、「マア」にどのような発音パターンがあるか、また、異なる発音によって「マア」の使用実態が変わるのかは、未だに不明である。以上のことを踏まえ、本研究は「マア」の出現条件の究明及び音声的特徴を明らかにすることを研究目的とする。

## 1.2 論文の構成

第1章では、本研究の研究対象となる「マア」を説明し、本研究の目的を述べる。第2章では、先行研究をフィラー全体を考察する研究の中で「マア」の特徴や用法について言及したものと、「マア」だけを研究対象としたものに分けて概観する。また、「マア」だけを研究対象とした研究をさらに「情報の独占に着目するもの」、「曖昧性に着目するもの」、「心内のわだかまりに着目するもの」、「他の選択可能性に着目するもの」という4つのグループに分けて、それぞれ説明した後、本研究の研究課題を述べる。第3章では、「マア」の特徴的な用例を考察し、各用例に共通するものから、「マア」の立場的優位性、視点の優位性、情動的優位といった観点から出現条件についての仮説を立てる。第4章では、自然会話と大学講義の用例を用いて、仮説の有効性を検証する。第5章では、音声的側面から「マア」を考察し、「マア」の音声的特徴及び使用実態を明らかにする。第6章では、本研究の結論をまとめ、日本語教育への示唆を考える。

---

## 第 2 章 研究の背景

---

## 2.1 はじめに

「マア」についての先行研究は、フィラー全体を主な対象としその中で「マア」に言及しているものと、「マア」だけを対象とするものに分けられる。

フィラー全体を対象とする研究は、すべてのフィラーの出現数、またはフィラー全体が持つ機能を考察するものがほとんどである。代表的なのは山根(2002)である。このような研究はいろいろなフィラーを概観するには有効で、異なるフィラーの比較もできるが、特定のフィラーの意味用法、使用実態など細かいところまで考察することができない。一方、「マア」だけを対象とする研究では、他のフィラーとの比較はないが、「マア」の意味用法などについて、具体的な考察が行われている。次節では、フィラー全体についての先行研究と「マア」だけを対象とする研究に分けて、先行研究を概観する。

## 2.2 フィラーについての先行研究

フィラー全体についての先行研究は、山根(2002)、落合(2017)、小西(2018)などが挙げられる。山根(2002)は、留守番電話、講演、電話、対面会話を分析データとし、フィラー全体を考察し、フィラーは「テキスト構成に関わる機能」、「話し手の情報処理能力の表出機能」、「対人関係に関わる機能」という三つの機能を持つと指摘している。

「テキスト構成に関わる機能」を担うフィラーは談話構造の段階の変わり目や発話節の境界に現れることがほとんどであり、倒置、引用、挿入、換言、単語などの並列などを示すことが多いと述べている。

例 2-1 K: で、そのストレスの解消の一つだったと思うんですね、アノ、ものを書くということが。

J: うわあ。

K: ええ、ええ。

(山根 2002: 221)

---

例 2-1 では、K の発話は倒置となり、元の語順は「ものを書くことが、そのストレスの解消の一つだったと思うんですね」である。ここでの「アノ」は倒置を予告し、「テキスト構成に関わる機能」を持っていると山根は述べる。

さらに、「話し手の情報処理能力の表出機能」は話し手の話しやすさに関わるものだと山根は述べている。話し手が一つの発話に多くの情報を表出する際、フィラーを使い、情報処理の時間を稼ぐことがある。こういう時に使われるフィラーは「話し手の情報処理能力の表出機能」を持っている。

#### 例 2-2

そういう意味におきましてですね、エー、エー、若い、イー、学生時代ですね、エー、自分たちは今どういう、ウー、学校で、エー、存在しているのかということ、マー、知ることは、意味の深いことだと。

(山根 2002:223)

例 2-2 は「話し手の情報処理能力の表出機能」の例である。例 2-2 で示すように、話し手が長い発話をする際、情報整理の時間を稼ぐためフィラーを連続させることがある。

山根が挙げた三つ目の機能は「対人関係に関わる機能」である。会話の時、聞き手のことを意識しながら発話し、特に相手に負担をかける発話（依頼や勧誘など）をする際、その和らげとしてフィラーが出現する。

#### 例 2-3

それで、合計 47.5 時間の集中クラスお願いしたいと思いますが、アノー、もしご都合がよければご連絡いただきたいと思います。

(山根 2002:223)

例 2-3 は集中クラスを依頼する際の発話である。ここで「アノー」を用いることによって、相手に対する直接的な感じが避けられ、発話を和らげる効果が生まれると山根は指摘している。

---

落合（2017）は、LINE とブログに出現するフィラーを分析し、その比較対象として、『名大会話コーパス』（NUCC）における若者同士の雑談とゲーム実況動画（口頭で述べる動画）を調査し比較を行った。考察の結果、LINE とブログの発信ともに、最も多く出現しているフィラーは「マア」である。一方、実況動画では「マア」の出現割合は2位で、実際の会話では「マア」は上位5位に入らなかった。つまり、「マア」は口頭での発話より、文字で書かれる際に出現しやすいフィラーとなる。

電子媒体に出現する「マア」は例 2-1 のようなものである。

#### 例 2-4

（中間テストに向けた準備が不安であるという話題において）

もうすっかり寒いし  
若干ひきこもり始めてる笑  
まあなんとかなりますよーに

（ブログ／落合 2017：95）

例 2-4 の「マア」は、話題を総括する際に出現している。このように、電子媒体に出現する「マア」は、「テキスト構成に関わる機能」を担うことが多い。例 2-5 のように「テキスト構成に関わる機能」を要する文脈では、「え」「ふーん」などの「対人関係に関わる機能」を担うフィラーは用いにくいと落合は述べている。

#### 例 2-5（ボランティアが大変だったことについて）

終わったあとの解放感はすごい良かった(^o^)  
{まあ／#え／#ふーん}、終わったらなんだかんだ楽しかった笑

（ブログ／落合 2017：95）

また、落合は「マア」の役割・機能は他のフィラーより汎用的で、話題をまとめる性質を持っていると指摘している。

小西（2018）は学習者の習熟度の視点から、母語話者の使用と比較しながら

---

フィルターの分析を行った。分析の結果、初級学習者は「ア類」、「エ類」、「ン類」のフィルターを多用し、「マア」の使用数はすべてのフィルターの内、7位であった。中級学習者の結果では、「マア」は6位で、上級学習者になると、「マア」は2位に上がった。つまり、簡単に習得できる母音型のフィルターとは違って、「マア」は習熟度が上がるにつれて、徐々に習得されるフィルターである。

一方、母語話者の使用を分析した結果、対話タスクと独話タスクとでフィルターを使い分けていることが明らかになった。母語話者は対話タスクのインタビュータスクで、「マア」を一番多く使用している。同じく対話タスクのロールプレイトスクは2位である。独話タスクであるストーリーテリングタスクでは、「マア」はほとんど使われていない。この結果から、「マア」は独話より対話で使用されやすいフィルターだと述べている。

これらの研究は、対面会話、電話、電子媒体などで使用されるフィルターを分析対象とし、フィルター全体の出現傾向や機能などを考察している。しかし、このようなフィルター全体を考察する研究において、「マア」の特徴や用法について踏み込んだ言及は見られない。

## 2.3 「マア」を対象とする先行研究

「マア」についての先行研究は次の4つに分類できる。①情報の独占に注目するもの ②「曖昧性」に注目するもの ③「心内のわだかまり」に注目するもの ④他の選択可能性に注目するもの。まずは情報の独占に注目するものから見ていきたい。

### 2.3.1 情報の独占

川田(2007)は「マア」の機能から、全ての「マア」を「ヘッジ」「フィルター」「情動的感動詞」の三つに分けて考察を行っている。例2-3はヘッジの「マア」である。ヘッジの「マア」は発話行為の程度を和らげる機能(川田2007:177)を持つと述べている。なお、川田(2007)では、情動的感動詞の「マア」を「まあj」、フィルターの「マア」を「まあf」、ヘッジの「マア」を「まあh」と表記する。

---

例 2-6 ヘッジの「マア」

A : 太郎って賢いよね？

B : まあ h, そうだね。

(川田 2007 : 177)

例 2-6 では、A の「太郎って賢いよね？」という発話に対し、B の「まあ」は「そうだね」という主張を和らげ、「必ずしも賢いとは限らない」という消極的な評価を表す (川田 2007 : 177)。

例 2-7 情動的感動詞の「マア」

まあ j, たいへんね。

(川田 2007 : 177)

情動的感動詞の「マア」は驚きなど話し手の情動の変化を表すものである。例 2-7 は情動的感動詞の「マア」で、このような「マア」はりきみや急な音調の変化を伴っていると川田は述べている。

例 2-8 フィラーの「マア」

もう一つイベントというのは、ま、肝試しということになります。え、ま、しかし人手も時間もないので、ま、シーツを被ってひゅうどろどろとか、ま、そういったことはできそうになかったので、ま、怖い話を書いた紙数枚を学校の中に置いて回ることにしました。

(川田 2007 : 179)

例 2-8 はフィラーの「マア」である。話し手は以前肝試しをした時のことについて話している。過去の体験を述べる際、短い「ま」を 5 回発している。ヘッジや情動的感動詞の「マア」とは違って、フィラーの「マア」は話し手の感情や態度の反映ではなく、客観的な事実（多くは自分自身の体験）を述べる際に発するものである。例 2-8 のような講演もしくは語りでは、フィラーの「マ

---

ア」が多用されている。

以上の三種類の「マア」を考察した結果、「ヘッジやフィラーとして振舞う「マア」は話し手が談話の中で聞き手とは共有していない情報を提供する際に現れる一方で、情動的感動詞としての「マア」は聞き手と情報が共有されうる環境で現れることを示した。」と川田は総括している。

### 2.3.2 「曖昧性」

「曖昧性」に着目する研究として、川上（1993, 1994）と富樫（2002）が挙げられる。

川上（1993, 1994）は「マア」の出現位置と出現前後の文を考察し、「マア」の用法を「応答型用法」と「展開型用法」に分けた。応答型用法は発話の冒頭に位置し、相手の発話を受けつつ、相手の事情を考慮して、消極的ながら同意を示すのに対し、展開型用法は文頭及び文中に位置し、発話内容についておおよその見解を述べる姿勢を示していると川上は指摘している。

#### 例 2-9 応答型用法

A：だって、俺、おまえ、金パーやで。

B：まあ、そや、えらい損やわけな。

（川上 1993：70）

#### 例 2-10 展開型用法

リンゴ：どんな内容ですか？

林アナ：エー、まあ、主婦のみなさんのパートなんです、労働省の調査によりますとですねえ、共働きの世帯とそうでない世帯を上回ったんですねえ。

（川上 1994:72）

「マア」の基本的な意味は「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べるという『概言』という姿勢・態度に関わる」と川上は述べている。

富樫（2002）は話し手の心内における情報処理の観点から、「マア」の考察を

---

行っている。「マア」の特徴を次の二つにまとめた。

- ①「まあ」と心内での計算処理過程とが関わりを持つ
- ②「まあ」が曖昧性を示す

(富樫 2002:23)

この特徴に基づき、富樫は「マア」の本質的機能を「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す、あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す」と記述している。

例 2-11 1980 円に消費税だから、**まあ**、2100 円くらいかな。

(富樫 2002:16)

例 2-11 では、消費税を計算する際、結果を出す前に「まあ」を使っている。ここでの「まあ」は、「ちゃんとした計算ができず、正確な答えを導き出していないことを示す」と富樫は説明している。

### 2.3.3 心内の「わだかまり」

大工原 (2010) は「マア」の用法を大きく「但し書き的用法」と「強調的用法」に分けている。但し書き的用法の音調は高低となって、話し手の内心のわだかまりを示すのに対して、強調的用法の音調は低高で延伸を伴い、わだかまりにこだわらないことを示す。なお、大工原 (2010) では、高低の発音の「マア」を「まあ」と表記し、低高で延伸を伴う「マア」を「まー」と表記している。

例 2-12 日本でリンゴといたら、**まあ**青森ですよ。

(大工原 2010:128)

例 2-12 の「まあ」の発音は高低の発音パターンとなっている。ここでの「まあ」は話し手の内心のわだかまり（細かいことを言えば、長野や岩手などの他のリンゴの名産地もあるけど）をほのめかし、但し書き的用法である。

---

例 2-13 日本でリンゴといたら、**まあ**ー青森ですよ。

(大工原 2010 : 128)

例 2-13 の「まあー」の発音は低高の発音パターンとなり、強調的用法となっている。但し書きの用法とは違い、例 2-13 の「まあー」は「わだかまり」に関する含意はなく、「ともかく青森だ」という強い主張に解釈されると大工原は述べている。

#### 2.3.4 他の選択可能性

山田 (2013) は心的処理過程の視点から「マア」を分析している。話し手は心内で適切な表現を検索し、複数の検索結果が出て、その中の一つを選んだ場合に「マア」が現れると山田は述べている。

例 2-14 もし、卒論とかね、3年次論文でやるんだったら、ゼミの先生に、  
アノー**マア**聞くのがいいと思うけど… (以下省略)

(山田 2013 : 305)

例 2-14 では、話し手は「ゼミの先生に」の発話の後、「アノー」を使い、心的データベースで適切な表現を検索している。検索が終わって、その結果（例えば「聞く」「相談する」「教えてもらう」など）が心的バッファに表示され、これらの結果から一つを選んだ場合に（例 2-14 の場合は「聞く」を選んだ）、「マア」が現れると山田は説明している。

また、小出 (2007) は「マア」を副詞とフィラーに分けて考えている。副詞の「マア」は用言またはそれに相当の語句を修飾するものである。例 2-15～2-20 は副詞の「マア」とされている。

例 2-15 このデザイン、**まあ**好きです。

例 2-16 **まあ**なんとかやっています。

例 2-17 **まあ**いいか。

---

例 2-18 この分じゃ、**まあ**誰も来ないね。

例 2-19 文句を言わず、**まあ**食べてごらん。

例 2-20 それじゃ、**まあ**説明しよう。

(小出 2007 : 58)

一方、フィラーの「マア」は命題要素，モダリティ要素を持たず，接続詞など談話構成上の要素にもならず，単に話し手の心的な活動を反映するものと記述されている。例 2-21 と 2-22 は囲碁番組での解説者の発話である。

例 2-21 **まあ**，一瞬の隙を，白が，あれですね，とらえましたね。

例 2-22 **まあ**，今黒番ですから，盤面で，ちょっと怪しいぐらいの感じかな。

(小出 2007 : 58)

例 2-21 と 2-22 の「まあ」は副詞として解釈することは困難であり，フィラーの「マア」とされている。解説者は囲碁の局面をモニターし，自分の見解を述べる際に「まあ」が現れると小出は説明している。

そして，小出は「マア」の用法を「注釈」，「例示」，「見解」，「引用」などに分けて，それぞれの意味を考察し，すべての意味に共通するのは「暫定性」であると指摘している。この「暫定性」について，小出は「いくつかの選択肢の中から，厳密な検討を経ることなく，とりあえず選択されたものである。」と述べている。つまり，小出の主張は「他の選択可能性」とともに「曖昧性」にも注目するものである。

## 2.4 研究課題

「マア」についての先行研究は，「マア」の意味を考察するものがほとんどである。「曖昧性」や「わだかまり」などの意味には説得力があるが，日本語学習者にとって意味を理解するだけで，単語を自在に使えるとは限らない。一つの単語を自在に使うためには，その単語の意味に加えて，使用条件を理解する必要がある。特に，「マア」の場合，「曖昧性」や「わだかまり」といった意味論

---

的な把握だけでは使用が困難であり、使用条件の解明が不可欠である。しかし、「マア」の出現条件を考察した先行研究はほとんどない。

自然会話の用例を検討していくと、「マア」の使用が発話者の立場、視点及び情報の独占と深く関わっていることに気付く。この観察を出発点として、本研究では「マア」の出現条件に対し、優位性を核とする仮説を提出し、その妥当性を自然会話の用例から検討していきたい。また、「マア」の使用は社会的立場による影響があると予想されるため、その影響を考察するため「教師と学生の会話」と「学生同士の会話」を分析データとする。さらに、自然会話から得られた結論が他の場面でも有効なのかを確認するため、大学講義という発話条件の異なるものも分析データに入れた。一方、「マア」にとって音声面の研究も不可欠だと思われる。大工原（2010）は「マア」の用法を大きく二つに分け、それぞれの発音時間、ピッチを考察しているが、研究者本人が発音したもののみを分析したため、「マア」の音声の実態解明は十分とは言えない。そして、この論文以外に「マア」の音声を考察した研究はほとんど見られない。「マア」は音声的特徴によって使用傾向が異なる可能性があり、音声の使用実態と前述した出現条件との関係についても考察する必要があると考えられる。そこで、本研究は以下の二つの研究課題を設定する。

研究課題（1） 「マア」の出現条件を明らかにする。

研究課題（2） 「マア」の音声変化（発音時間、ピッチ）の使用実態及び出現条件との関係を明らかにする。

---

### 第 3 章 「マア」の出現条件の仮説

---

### 3.1 立場的優位性

先に述べたように、「マア」の使用は発話者の立場、視点及び情報の独占と深く関わっていると考えられる。具体的な用例の検討から、「マア」の出現条件に対する仮説を提示したい。

まず、「マア」の使用者が**社会的立場に制限される**ことがある。

次の文は会社の朝礼での発言で、担当者が今日の仕事について説明した後で、リーダーがそれをまとめる言葉である。

例 3-1 a **マア**，そういう事ですので，ミスのないようにお願いいたします。  
(作例)

この場面で、朝礼の司会者（若手社員）でもこれと同様の発言をすることはできるが、その場合「マア」を外した次の発言になるだろう。

例 3-1 b そういふ事ですので，ミスのないようにお願いいたします。  
(作例)

若手社員がリーダーに「**マア**，そういう事ですので，ミスのないようにお願いいたします。」と言えるかを日本語母語話者 10 名にアンケートをとった。<sup>2)</sup>「自然」，「やや自然」，「どちらともいえない」，「やや不自然」，「不自然」の五段階評価で，「自然」は 1 点，「不自然」は 5 点とする。判断の結果，10 人のうち「不自然」を選んだのは 8 名で，平均点数は 4.6 である。つまり，若手社員がリーダーに「マア」のついた 3-1 a を使うのは，かなり不自然な発話だと考えられる。

あるいは，店と顧客の発言では，「マア」の使用は顧客だけに限定される。

---

<sup>2)</sup> アンケートの参加者は以下の通りである。

20 代から 30 代の学生 5 名，そのうち男性 2 名，女性 3 名。

20 代から 50 代の社会人 5 名，そのうち男性 2 名，女性 3 名。

---

次の例文は工務店での商談の会話である。

例 3-2 a 工務店：作業はこのような流れになりますが、よろしいでしょうか。

顧客：これだけ考えていただければ、私どもも安心できます。

例 3-2 b 工務店：作業はこのような流れになりますが、よろしいでしょうか。

顧客：マア、これだけ考えていただければ、私どもも安心できます。

例 3-2 c 工務店：？ マア、作業はこのような流れになりますが、よろしいでしょうか。

顧客：これだけ考えていただければ、私どもも安心できます。

(作例)

顧客の発言には「マア」を付加することが可能だが、工務店の発話には「マア」が付加しにくい。母語話者に判断を求めた結果、工務店が顧客に対して「マア」を使うと 10 人のうち 7 人が「不自然」もしくは「やや不自然」と感じて、平均点数は 3.6 である。それに対し、顧客が工務店に「マア」を使う発話は 10 人のうち 8 人が「自然」, 「やや自然」を選び、平均点数は 3.6 である。

例 3-3 は上司と部下が同席している会議での発話である。

例 3-3 a それでは、説明します。

例 3-3 b それでは、マア説明します。 (例 1-6 より一部改変)

上司は 3-3 a と 3-3 b 両方とも発話可能だが、部下は 3-3a だけを発することができる。上司に対し、部下が 3-3b を発すると尊大な印象があり、不自然になる。母語話者に判断を求めた結果、「それでは、マア説明します。」を上司に使う場合、10 人のうち 9 人が不自然を選び、平均点数は 4.9 に達している。

以上の用例から、「マア」の使用は社会的立場によって制限されることが分かる。「マア」は立場的に下位の人から上位の人に発することが難しいフィラーと考えられる。「マア」のこの特徴を立場的優位性としてまとめる。

---

## 3.2 視点の優位性

前節では、立場的優位性との関係を考えてが、「マア」の使用は視点の優位性とも関係している。それは例えばメタ・レベルの発言に現れる「マア」に端的に表れているように見える。例 3-4 a はメタ・レベルの発言に見られる「マア」である。

例 3-4 a マア，冗談だけど。

(作例)

例 3-4 a はこれまでの話が冗談だったことを伝えるメタ言語的な発言である。例 3-4 a の発言では「マア」をつけることが自然だと思われる。このような状態を本稿では、話者に視点の優位性があると呼ぶことにしたい。視点の優位性を次のように規定する。「相手に見えていないものが見えており、その違いが重要だと感じた時、話者には視点の優位性があるとする。」例 3-4a では、冗談であることに相手が気づいていないので、ここに視点の優位性が認められる。

一方、同じ話をしていても、相手が冗談であることに気づいてしまうと、視点の優位性が失われるため、「マア」は使えなくなる。

例 3-4 b マア，冗談だよ。

(作例)

相手が冗談だと気づいた場合、例 3-4 b の発話は不自然になる。アンケートの結果でも、相手が冗談だと気づいた場合、例 3-4 b の自然度の平均点数は 3.6 である。この場合には例えば例 3-4 c, d のような「マア」を使わない形になるだろう。例 3-4 c, d の平均点数は共に 1.7 である。

例 3-4 c そう，冗談だよ。

例 3-4 d うん，冗談だよ。

(作例)

---

相手に冗談であると気付かれてしまうと、話し手の優位性が失われてしまう。「マア」と優位性の関係を「曖昧性」の「マア」を使って、さらに考えてみたい。「曖昧性」を示す「マア」は以下のようなものである。

例 3-5 1980 円に消費税だから、マア、2100 円くらいかな。

(例 2-11 再掲)

母語話者が「マア」に対して直感的に感じる意味が曖昧さとかかわるものであり、先行研究の多くがここから「マア」の意味を導いていることは既に述べた通りであり。だが、曖昧さは「マア」の使用を決定する条件として優先度が高いとは言えない。曖昧さの意味を有する文であっても「マア」が使えない場合があるからである。

複数の人が金額を予想する場面を考えてみたい。この場面で「マア」を使えるのは、最初に予想を言う者に限られる。例 3-6 は二人が金額を予想する場面であり、A に反論する形で B が異なる予想を提示している。どちらの予想も曖昧さを含んでいるが「マア」が使えるのは A だけである。

例 3-6 A 1980 円に消費税だから、マア、2100 円くらいかな。

B ??マア、2200 円くらいだよ。

(例 3-5 より一部加筆)

B の発言は「曖昧性」を含んでいるだけでなく、A よりも自分の計算が正しいという自信や優越感も背景にあると考えられる。にもかかわらず、「マア」が不自然になることから、「マア」の使用を可能にする条件として、曖昧さや優越感が必ずしも重要でないことが分かる。一方、同じ発言に対する反論であっても、B の発言が次のようであれば「マア」の使用が可能になる。

例 3-7 A 1980 円に消費税だから、マア、2100 円くらいかな。

B 2100 円よりは高いとは思うけど、マア、いずれにしても予算内に

---

収まってよかったよ。

(例 3-5 より一部加筆)

どちらの B も A の計算結果に否定的であるが、例 3-7 の B では「マア」の使用に違和感がほとんどなくなる。例 3-6 の B と例 3-7 の B の違いはどこにあるのか。両者の間には、見ているもの、思考の及ぶ範囲に違いがある。例 3-6 の B が意識を向けている対象は計算結果であり、先に発言した A と同じものである。相手よりも優れているという優越感を持った発言であっても、思考の及ぶ範囲が同じであれば「マア」を使うことができない。これに対して例 3-7 において B が見ているのは、計算結果だけでなく、計算結果と予算の照合という相手に見えていないものである。

視点の優位性を「曖昧性」以外の例文で検討してみたい。次も A と B が議論している場面である。B の発言には自信があり、A に対する優越感も感じられるが、「マア」の使用が不自然になる。A と同じく出世について考えている点で、A に対する視点の優位性を欠いているためだと考えられる。

例 3-8 A マア、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B? マア、出世したいからこそ、あえて言うんだ。

(作例)

ちなみに、例 3-8B の発話に対して、10 人の母語話者のうち、8 人が「不自然」もしくは「やや不自然」を選んだ。B の自然度の平均点数は 4.4 に達している。これに対して、例 3-8 の会話が次のように展開すれば「マア」の使用が可能になる。

例 3-9 A マア、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B マア、出世が全てのお前には分からんよ。

(例 3-7 より一部改変)

母語話者のアンケートでは、例 3-9 の B の平均点数は 2.1 で、母語話者 10 人の

---

うち 6 人が「自然」「やや自然」を選んでいる。例 3-8 と例 3-9 では、B の思考の及ぶ範囲に違いがある。例 3-9 の B は出世以外のものを見ている点で A に対して優位性がある。

視点の優位性が「マア」にとって重要であることを示すために、なだめの「マア」と呼ばれる用法を考えてみたい。他人をなだめる際に使用する「マア」はなだめの「マア」と呼ばれる（大工原（2010）など）。例 3-10 はなだめの「マア」の用例である。

例 3-10 マア，そんなに興奮しないで。

（作例）

例 3-10 は興奮している相手を落ち着かせる，なだめの「マア」である。例文のように「マア」の後に文が続く形だけでなく、「マアマア」だけでも，なだめる発言を作ることができる。なだめの「マア」の機能は、「落ち着いて」というメッセージを伝えることであり，視点の優位性から導かれる機能と考えることができる。興奮して状況を冷静に見えなくなっている相手に，冷静になって見方を変えようと伝えるのがなだめの「マア」であり，相手に見えていないものが見えているという意識が発言の前提にある。「マアマア」だけでなだめの表現を作れることは，視点の優位性が「マア」にとって重要な性質であることを示す一つの証拠と言えるのではないだろうか。

さらに，独り言で使う「マア」も視点の優位性に関わると考えられる。独話に使われる「マア」は例 3-11～3-13 のようなものである。

例 3-11 （仕事の山を前にして独り言で）まあ，なんとかなるかな。

例 3-12 （終わった仕事を見て独り言で）ひとまず，ま，終わりっと。

例 3-13 （乗り損ねたバスを見送りながら）ま，いいか。

（富樫 2002 : 22）

独り言の「マア」は，自分自身をなだめる（例 3-13）か，もしくは自分自身を

---

励ます（例 3-11, 3-12）発話がほとんどである。独り言の「マア」は聞き手はいないが、いわば自分を客体化して観て、自分自身に聞かせる発言であり、話している自分は客体化した自分よりも視点の優位性がある、すなわち客体化した自分には見えない事情が見えているという意識がその背景にある。

### 3.3 情動的優位性

ここまで立場と視点の優位性の重要性を論じてきたが、「マア」にはこれとは少し異なる使われ方がある。先行研究ではあまり論じられていないが、自然会話では、自分自身について語る時に「マア」を使うことが多い。本研究では、このような「マア」を自分語りの「マア」と呼ぶことにしたい。例 3-14 と 3-15 は自分語りの「マア」である。自分語りの「マア」は、一つの発話に集中して出現する傾向がある。

例 3-14 もう一つイベントというのは、ま、肝試しということになります。え、ま、しかし人手も時間もないので、ま、シーツを被ってひゅうどろどろとか、ま、そういったことはできそうになかったもので、ま、怖い話を書いた紙数枚を学校の中に置いて回ることになりました。

（川田 2007 : 179）

例 3-15 （川田注：父親は）かつての日本国有鉄道といういわゆる国鉄の、ま一職員だったということもありまして。えー、ま一、県内新潟県内ですけれど、ま、転居しました。

（川田 2007 : 178）

例 3-14 は自分の過去の経験、3-15 は父親についての発話である。3-14 と 15 の「マア」は「聞き手とは共有していない情報を提供する際に現れる」（川田 2007 : 189）という主張とも重なっている。本研究ではこのような「マア」を立場的優位性、視点の優位性とは異なる「マア」の使用条件と考えてみたい。自分語りでは、常に話し手に情動的優位性があるので、これを情動的優位性としてみた

---

い。

### 3.4 本章のまとめと「マア」の出現条件の仮説

ここまでの検討を整理してみたい。「マア」は優位性と深くかかわっており、その優位性は立場的優位性、視点の優位性、情動的優位性の三つの優位性とまとめられる。

- ・ 立場的優位性

立場的に上位の人は「マア」を使いやすいが、目上に対しては「マア」が使い難い。この背景として立場的優位性が指摘できる。

- ・ 視点の優位性

相手に見えていないものが見えており、その違いを感じつつ発話する時、話者には視点の優位性がある。

- ・ 情動的優位性

情動的優位性は話し手が相手の知らない情報を持つことで生じる優位性。典型は自分自身について語る自分語りの「マア」である。

ここで出現条件について確認しておきたい。「マア」の出現条件とは、「マア」の出現を可能にする条件（必要条件）ということである。すなわち、この条件を満たさなければ「マア」は出現できないが、満たしていれば「マア」が必ず出現することにはならないという関係である。

ここまでの考察を踏まえて、「マア」の出現条件について、以下の仮説を提案する。

「マア」は話し手が立場的優位性、視点の優位性、情動的優位性のいずれかを感じる場所に出現する。

---

三つの優位性は次のような関係にある。まず、三つの内の二つは会話以前に獲得された優位性である。すなわち、立場上の優位性は社会的関係によって得られる優位性、情動的優位性も既に持っていた情報によって得られる優位性である。これに対して、視点の優位性は会話中に得られる優位性で、思考によって得られる優位性となる。つまり、三つの優位性は、優位性がどのように得られるかによって優位性を区別したものということになる。

三つの優位性を次のように一本化する可能性も考えられる。

「マア」は話し手が優位性を感じる場所に出現できる。

しかし、三つの優位性仮説から上の仮説を導くことはできない。三つの優位性を上に一本化するためには、次を確認しておく必要があるからである。

あ) 優位性を得る方法が他に存在しないこと。

い) 他の方法が存在する場合、第四の優位性においても「マア」が出現できること。

筆者は（あ）について検討してみたが、他の優位性が存在するか否かを確認できなかった。したがって、全ての優位性が「マア」の出現条件になること（＝（い））も確認できていない。そのため、今後の検討では三つの優位性の仮説を並列して使用することにする。

第4章では、自然会話の用例を使い、仮説の有効性を検証する。

---

## 第 4 章 自然会話の用例からの検証

---

## 4.1 検証の手順

第3章では、「マア」の用法から、出現条件の仮説を提出した。本章では用法とは異なる視点から用例を整理し、次の手順で仮説の検証を行う。

- ① 自然会話において「マア」と共起しやすい複数の形式を探す。共起しやすい形式は語彙や文法形式など、用法とは異なる基準から選ぶ。
- ② 各形式からランダムに例文を選び、選んだ全ての「マア」が仮説に合致することを確認する。
- ③ 「マア」との共起が特に多い形式について、その形式と仮説との必然的関係を明らかにする。

## 4.2 会話データの概要

本研究で使用する会話データは、学生同士の会話、学生と教師の会話（各9組×15分、合計約270分）及び大学講義（90分の文系講義×5本、合計約450分）を録音し、文字化したものである。自然会話は熊紅芝氏（現江蘇師範大学外国語学院副院長）が2007年名古屋市で録音したもので、学生同士の会話は親しい友人同士で全て同性のペアである。学生及び友人は全員20代で、そのうち男性ペアは5組、女性は4組である。学生と教師の組は全て初対面で、学生は20代、教師は40代から50代である。いずれも同性のペアであり、男性は5組、女性は4組である。大学講義のデータは筆者が2017年東広島市で録音したもので、教師5人は全員40代から50代の男性である。講義は学部生対象の文系講義である。

話し手を示すアルファベット及び数字は、以下の意味を表す。J：日本語母語話者，T：教師，S：学生，F：学生の友人，数字：参加者の番号。例えば，JT6は日本語母語話者教師6番を表す。

文字化する際に使用した記号は『会話分析入門』（串田秀也他 2017）に基づき、若干の変更を加えたものである。記号の意味は以下の通りである。

---

△△ : 個人情報などに関わる内容。

[ : この記号をつけた複数行の発話が重なり始めた位置。

] : この記号をつけた複数行の発話の重なりが解消された位置。

↑ : 尻上がりの抑揚。

。 : 尻下がりの抑揚。

(数字) : 沈黙の秒数。

(hh) : 笑い。

### 4.3 自然会話の「マア」の出現傾向

本節では、「マア」の出現しやすい形式と優位性の関係について考察する。出現しやすい形式については特定の文法形式との共起、特定の語との共起など客観的に区別できる様々な形式を候補として立て、その中から「マア」の用例が多く見られる形式として、以下の7つを設定した。

- ・ 逆接形式との共起
- ・ 順接との共起
- ・ 挿入との共起
- ・ 「思う」「考える」との共起
- ・ 例示との共起
- ・ あいづちとしての使用
- ・ 笑いとの共起

各出現形式の認定基準は以下の通りである。

逆接形式との共起 : 「マア」の前または「マア」の後に逆接の接続詞・接続助詞が出現する例。(主節や従属節の違いではなく、逆接語を使う意識が「マア」の出現に影響すると考えられ、逆接の前後に出現する「マア」を分けて考慮しないことにする。そして本研究では、逆接の接続詞・接続助詞を逆接語としてまとめた。また、一続きと認められれば、逆接語と「マア」の間が離れている例も含めた。

---

順接との共起：「マア」の前または「マア」の後に順接の接続詞・接続助詞が出現する例。(逆接と同様で、順接語を使う意識が「マア」の出現に影響すると考えられ、順接の前後に出現する「マア」を区別しないことにする。)

挿入との共起：挿入の認定基準は、丸山他(2004)を踏襲し、以下の3つとした。(丸山他は挿入節の末尾の形式を限定しているが、より多様な形態を検討するため、本研究においては挿入節の末尾の形式を限定しない)

- ① その前後に係り受け関係を持つ要素があること。
- ② その終端で発話を区切ると、その前後の要素間の文法的・意味的な整合性が保てないこと。
- ③ 元の発話に対する「前置き」や「断り書き」になっており、その部分を除いても影響がないこと。

「思う」「考える」との共起：「マア」の後に「思う」「考える」が出現する例。(一続きと認められれば、「マア」と「思う」「考える」との間が離れている例も含めた。)

例示との共起：例を挙げる際に「マア」を使う用例。

あいづちとしての使用：あいづちと認められる「マア」。

笑いとの共起：「マア」の前後に笑いがある例。<sup>3)</sup>

---

<sup>3)</sup>「笑い」を入れたのは、自然会話において、笑い声の前後に出現する「マア」が多いためである。「マア」を発するその場の空気が普通のものなのか、緩い空気なのかだけを見るため、笑いの前と後に出現することを分けて考慮しない。(逆接、例示など前後を分けて考慮しない項目との一貫性を保つこともその理由の一つである。)

各出現形式の内訳を整理して、下の表1と表2にまとめた。各出現形式は排他的な関係ではないため、合計の割合は100%を超えている。

表1 学生と教師の会話での「マア」の出現形式

	学生	教師
逆接形式との共起	14 (42.4%)	59 (36.2%)
順接との共起	0 (0.0%)	19 (11.7%)
挿入との共起	2 (6.1%)	12 (7.4%)
「思う」「考える」との共起	1 (3.0%)	5 (3.1%)
例示との共起	0 (0.0%)	6 (3.7%)
あいづちとしての使用	0 (0.0%)	1 (0.6%)
笑いとの共起	1 (3.0%)	13 (8.0%)
その他	16 (48.5%)	80 (49.1%)
「マア」の出現総数	33	163

表2 学生同士の会話での「マア」の出現形式

	学生	友人
逆接形式との共起	8 (22.9%)	15 (42.9%)
順接との共起	5 (14.3%)	2 (6.3%)
挿入との共起	1 (2.9%)	4 (12.5%)
「思う」「考える」との共起	3 (8.6%)	2 (6.3%)
例示との共起	0 (0.0%)	0 (0.0%)
あいづちとしての使用	5 (14.3%)	4 (12.5%)
笑いとの共起	3 (8.6%)	4 (12.5%)
その他	12 (34.3%)	11 (34.4%)
「マア」の出現総数	35	32

どちらの表も「その他」の割合が高くなっているため、この点について説明しておきたい。本章の目的は第3章の仮説を検証することである。第3章では意

味内容から仮説を導いているため、本章では意味内容とは異なる要素から「マア」を分類し、分類された用例内の代表的なものが仮説と合致することを確認することで、仮説の妥当性を検証したい。「マア」と共起しやすいもので、客観的に取り出せるものとして具体的に考えたのは文法形式である。だが、逆接を例外として、「マア」と共起しやすい文法形式を見つけることができなかった。

(表には加えていないが「言い換え」と「条件」(仮定, 譲歩) など等の可能性も探っている。) また、特定の語彙との共起も可能性として考えてみたが、語彙については「思う」「考える」を除いて共起しやすいものを見出せなかった。あえて言えば、「文頭」が「マア」と最も高い対応を見せる文法的特徴となるが、「文頭」は本稿の目的に対して意味のある分類項目とならないためこの表には加えていない。ここから、「マア」と共起しやすい唯一の文法形式として逆接が重要であることが分かる。「マア」と逆接の共起しやすい理由が本稿の仮説から説明できるとすれば、仮説の検証に大きく近づいたと言えるのではないかと。

また、当初は「マア」と共起しやすい形式として「自分語り」を考えていたが、「自分語り」は仮説を立てるために使用した用法であり、これを検証に使ってしまうと循環論法になるため「自分語り」を分類項目には加えていない。ちなみに、「自分語り」の用例は、学生同士の会話で 12 例 (17.9%)、教師と学生の会話では 76 例 (38.8%) 存在し、一定の割合を占めている。自然会話において「自分語り」に「マア」が現れやすいことも、本稿の仮説の有効性を示す現象の一つと言えるはずである。

表 1 と表 2 の「マア」の出現総数を比較すると、顕著な傾向として教師が学生に対して発話する際、「マア」が出現しやすいことが挙げられる。教師と学生の発話数はほぼ同じであるが、教師の「マア」の出現数は学生の約 5 倍になる。教師と学生の会話の内訳は次のようである。

表 3 学生と教師の会話で教師の「マア」の出現数

	JT1	JT2	JT3	JT4	JT5	JT6	JT7	JT8	JT9	合計
出現数	17	20	5	4	14	35	45	3	20	163

表 4 学生と教師の会話で学生の「マア」の出現数

	JS1	JS2	JS3	JS4	JS5	JS6	JS7	JS8	JS9	合計
出現数	3	0	9	1	3	2	6	6	3	33

表 3, 4 の数字を見ると, 教師と学生の会話では, 教師の「マア」の出現数が多いことが分かる。教師の「マア」の使用数には個人差があるが, 傾向として学生の「マア」より出現数が多いと言えるだろう。この結果は, 立場的優位性の仮説と合致している。ただし, 教師の発話ならどこにでも「マア」が現れるわけではなく, 出現場所には明らかな偏りがある。教師の発言で, 最も出現数の多い形式は「逆接形式との共起」, 「順接との共起」である。具体的な用例を優位性との関わりの観点から考察していきたい。(逆接助詞と順接の助詞は下線で示す。)

例 4-1 と 4-2 は逆接形式と共起する「マア」の用例である。教師と学生の会話では, 学生は逆接形式と共起する「マア」を 14 回発しており, 全体の 42.4% を占めている。教師が発したのは 59 回で, 36.2% を占める。

例 4-1 (JT6 と JS6 は学校の施設は足りるかどうかについて話している。)

JT6 だから食堂, そうですね。もっとあったほうがいい [ですね]。

JS6 [ですよ] (hh)。

JS6 でもこの大学はほんとに, なんか設備はどんどんどん整えて, てるじゃないですか。

JT6 まあでもあのう学芸も [できたし], 学生は, 増えてますよね。

JS6 [そうですね], ほんとうに (hh)。

(教師と学生の会話)

例 4-1 では, JT6 は学校の施設はまだ足りていないという観点をもち, 「だから食堂, そうですね。もっとあったほうがいいですね」と発話している。JS6 の「なんか設備はどんどんどん整えて, てるじゃないですか」という学生の発言に設備が増えすぎているという批判的な調子があるのに対して, JT6 の発話で教師は根拠を示して反論している。反論なので「でも」という逆接助詞が

---

使われ、「学芸もできたし、学生は、増えてますよね」が設備を増やす根拠となっている。学生の気づいていない根拠を出している点に視点の優位性を指摘することができる。また、教師が学生に対する発話で、立場的にも優位である。

例 4-2 では, JT6 と JS6 は日本語教育専攻の院生の人数について話している。

例 4-2 JS6 今 M1, ですね。日本人だけだと、正規でちゃんと入った人は 4 人だけですね。[3 人] が学部から来た人で、1 人が、あの一

JT6 [ええ。]

JS6 主婦の方が。

JT6 あ、そう [ですか。]

JS6 [もう教] 授経験のある人が [来て、勉強] されてて。で、そのうち今 2 人が、あとうタイ行って、ベトナム行ってた子が

JT6 [うーんー。]

JS6 戻ってきてまたそこに参加してるって感じ [ですけど。]

JT6 [あー。]

JT6 まあでもそのぐらいがちょうどいい数ですね。

(教師と学生の会話)

「日本人だけど、正規でちゃんと入ったのは 4 人だけですね」という言葉を受けて、4 人の院生の経歴へと話題が進んでいる。JT6 の「まあでもそのぐらいがちょうどいい数ですね」は、個人の経歴から人数の妥当性に話題（視点）を変える発言である。話題を変えるために「でも」という助詞がある。教師である自分の経験から人数の妥当性を判断しており、教師としての経験を踏まえることで視点の優位性を支えらる。

例 4-3 は順接と共起する「マア」である。教師と学生の会話で順接と共起する 19 回の「マア」は全部教師のもので、教師が発する「マア」の 11.7% を占めている。

---

例 4-3 (JS1 は院生セミナーの実行委員長を務めた時、情報交換の効率が悪いことについて話している。)

JS1 で、結局この情報発信するだけなら、

JT1 ええ。

JS1 メールで言えたようなこと。

JT1 うん、うん。

JS1 形式的に [集ま] ってるだけの [ような気がしてきて。]

JT1 [うん。]

JT1 [ああ、でもそれって時間の無駄でしょ]

JS1 すごい、思いま [した。] 申し訳なくて (hh)。

JT1 [ええ。]

JT1 だから例えば昔はそういうふうな、あのうイ、まあイーメールのよう  
なものがなかったから、稟議書でまわすわけですけど。

JS1 はい。

JT1 今はメールでいろいろなことがだからなされてますね。

(教師と学生の会話)

JS1 はセミナーの実行委員長をやった時の経験を述べる際、情報交換の効率が悪いことを語った後、JT1 は「でもそれって時間の無駄でしょ」と述べ、視点を変えて稟議書の出現背景を説明している。説明する際、「まあ」と「から」を使っている。これは相手の知らない稟議書の出現背景を説明する文であり、立場的優位性、情動的優位性ととも、視点の優位性もある。次に学生が教師に対して発している「マア」を確認してみたい。

出現数の上位を占める逆接、順接の用例を見てきたが、次に挿入、「思う」「考える」、笑いと共起する「マア」の用例を見てみたい。例 4-4 は挿入と共起する用例である。教師と学生の会話では、学生は挿入と共起する「マア」を 2 回発して全体の 6.1%を占め、教師が発したのは 12 回で 7.4%を占めている。(挿入節は下線で示す。)

例 4-4 (JT3 はインドネシアの治安状況について話している。)

---

JT3 なんかジャカルタは，インドネシアもあまりこう，まあ銃もち  
ろんだめなんですけども。

JS3 はい。

JT3 ナイフでどうのとかもあんまりなくて。

JS3 ふーん。

JT3 いない，空き巣ねらいとかのほうが多くて。

JS3 へー。

JT3 いわゆる強盗は少なくて。

JS3 あ，そうなんですか。

(教師と学生の会話)

例 4-4 では，JT3 は「インドネシアもあまりこう，ナイフでどうのとかもあんまりなくて。」を発する際に，「まあ銃もちろんだめなんですけども。」という節を挿入している。この挿入節文は，主文の内容を補足するものである。それまでの会話の内容と挿入節(「まあ銃もちろんだめなんですけども。」)を比較すると，挿入節ではそれまでの会話には出ていない銃の規制について補足していることが分かる。銃規制について聞き手が何の認識も持ち得ないが，話の流れ上で必要だと判断して(それを言っておかないと聞き手が誤解する可能性がある)，これを挿入したと考えられる。つまり，聞き手の気づいていない重要な情報の提示であり視点の優位性があると判断できる。

例 4-5 は，「マア」が「思う」と共起する用例である。学生は「思う」「考える」と共に「マア」を使ったのは 1 回(全体の 3.0%)で，教師は 5 回(全体の 3.1%)で多いとは言えないが，この例も確認しておきたい。

例 4-5 (JS4 は将来の自分の仕事について話している。)

JS4 あの国語の先生って，

JT4 はい。

JS4 文学志向だと思いますけど，

JT4 はいはいはい。

---

JT4 えー。

JS4 まいろんな視野をもった、

JT4 ふーんー

JS4 国語の先生になれたらなって、思います。

(教師と学生の会話)

例 4-5 では、JS4 は自分自身の将来の仕事について語る中で「ま」が現れ、「思う」と共起している。自分自身のことを語っているため、情動的優位性が認められる。

例示と共起する「マア」は、次の例 4-6 のようなものである。教師と学生の会話で例示の時に「マア」を使ったのは教師のみであり、使用数は 6 回で、全体の 3.7%になっている。

例 4-6 (JT1 は稟議書について説明している。)

JT1 そう書き込んでいけば [いいんです。] そうそうそうそう。

JS1 [書き込んでいて、]

JT1 うん。

JS1 で、まとめる人がいれば、

JT1 うん。

JS1 それ、

JT1 そう。で、まある程度みんなの意見が出つくしたところで、まあ例え  
ば大多数の意見はこのようですので、でこのようにしたいと思いま  
す。で、異議のあるかただけは、例えば何月何日何時までに、あの、  
メールでお知らせくださいと。

JS1 はい。

(教師と学生の会話)

例 4-6 では、JT1 は稟議書について説明している。JS1 の知らない説明であるため、情動的優位性がある。これは最初の「ま」の出現背景だと考えられる。2 番目の「まあ」は挿入であり、「例えば」とも共起している。「まあ例えば」で始

---

まる例示部分においても情動的優位性が続いている。それに加えて、複数の選択可能性の中から具体例を取り出す例示では、提示する例に高い価値があると感じているはずである（だからこそ、その例を選んでいる）。この意識を背景に「まあ」が出現していると考えることができる。

例 4-7 は笑いと共に起る「マア」の用例である。学生は笑う場面で「マア」を 1 回 (全体の 3.0%) 使い、教師は 13 回 (全体の 8.0%) 使っている。

例 4-7 JS7 あのういろいろやってくれて。もう、(hh) お前彼女いるのかって。(hh) 彼女も紹介してやるよみたいなことまで。あーみたいな (hh)。

JT7 (hh) たしかに。

JS7 そうそう。

JT7 (hh) 外国語勉強するには (hh)、まあんー、友達っていうか、お友達を作るのが一番 (hh)。

(教師と学生の会話)

例 4-7 では、JS7 は以前世話になった中国人について話している。この会話は初対面の教師と学生のものであり、当初は互いに遠慮しながら行っていたが、「彼女を紹介してくれる」という話題になってから、遠慮の気持ちが緩んで二人とも笑っている。そこに「マア」が現れる。

ここで注意したいのは、学生と教師が二人とも笑っている会話の中で教師にだけ「マア」が現れていることである。あるいは、既に述べたように笑いとの共起が教師 13 回に対して学生は 1 回だけである。当初は笑いと共に起る「マア」が多いと予想したが、笑いと共に起っているように見える「マア」を検討するといずれの「マア」も優位性を伴っていることを確認できた。例 4-7 では教師が「友達」と「お友達」を区別し、「まあんー、友達っていうか、お友達を作るのが一番 (hh)。」となっている。相手の「彼女」を「紹介」するという卑近な発言に対し、教師の発言は「彼女」の存在意義を語学学習の効果という学生の発想にはなかった視点からとらえており、視点の優位性が認められる。そして、最後の「(hh)」は「お友達」に込めた意味が笑いを引き出しており、「マア」

---

が笑いを直接引き出したものではないと判断される。

ここまで、教師と学生の会話の中で、特定の語や文法形式と共起する「マア」の用例を検討してきた。ただし、既に述べたように、特定の形式と共起しない、表では「その他」に分類される「マア」の割合がかなり高い。(学生は 48.5%で、教師は 49.1%である。) そのため、最後に特定の語や形式と共起しない「マア」の用例について検討したい。

例 4-8 (JT6 は学校の食堂の変化について話している。)

JT6 やっぱり前は、[中央食堂と]、[あのう] 地下の外大食堂 [っていう]  
二つ大きな食堂があったんですけど。

JS6 [ありましたねえ。]

JS6 [はい。]

JS6 [はい。]

JS6 あ、そっかそっか。

JT6 今、もう外大食堂 1 つになって。

JS6 ですね。

JT6 まあむしろコンビニあたりで買って教室で食べる人のほうが  
[多いですかね。]

JS6 [うんー]、そうですね。

(教師と学生の会話)

例 4-8 では、JT6 は前は二つ大きな食堂があったが、今は外大食堂 1 つになったと述べたあと、「まあむしろコンビニあたりで買って教室で食べる人のほうが多いですかね。」と述べている。ここでの「まあ」は特定の形式と共起していない。食堂の数が減ったという話題から視点を変え、コンビニで買って教室で食べる人が多いという相手の気づいていない新たな根拠を出している点で視点の優位性が認められる。その気持ちは、「むしろ」という副詞に表れている。次の例 4-9 も同じく特定の形式と共起していない「マア」の用例である。

例 4-9 (JS6 は中国語学科の学生の人数について、JT6 に聞いている。)

---

JS6 中国語学科は今何人，学生。

JT6 今は1年生はあんまり少ないんですけど，60人です。

JS6 2クラスですか。[30, 30人。]

JT6 [2クラスで]す。で，今の2年生はあの90人近いです。

JS6 おー。すごいですね。

JT6 結局何人入ってくるかわからないので。

JS6 そうですね。

JT6 定員は60人なんですけれどもね。

JS6 あー。

JT6 で，2クラスに分けると，ですから2年生なんか40人[近く。]40人以上いるわけですよ。

JS6 [うん。]

JS6 結構多い。

JT6 今年は30人。30人だとまあやりやすい[ですね]。

JS6 [やりや] すいですか。

(教師と学生の会話)

例 4-9 では，中国語学科の学生の人数を聞かれて，JT6 は「定員は60人（…中略）今年は（筆者注：1クラスは）30人。30人だとまあやりやすいですね。」と述べている。ここでの「まあ」も特定の形式と共起していない。JT6 は教師としての長年にわたる経験を持ち，その経験に基づき「30人だとまあやりやすい」という結論を出している。教師が学生に対する発話で，立場的優位性があり，さらに教師としての自分の経験を踏まえた発言であり，自分語りの「マア」と言え，情動的優位性があると考えられる。

最後に自分語りの例も検討しておきたい。学生は自分自身について語る際に，「マア」を20回(全体の60.6%)使ったのに対し，教師は「マア」を56回(全体の34.4%)使用し，自分語りが高い割合を占めている。例 4-10 は自分語りの「マア」の用例である。

例 4-10 (JS1 はボランティア活動をした時の体験について話している。)

---

JS1 集住地域のー、  
JT1 うん。  
JS1 学校で、  
JT1 うん。  
JS1 まあ、ボランティアをしながら2年生を対象に。  
JT1 うん。小学校2年生？  
JS1 はい。  
JT1 はい。  
JS1 で、まあ行動を、見て、  
JT1 うん、うん。  
JS1 メモをとってー、  
JT1 うんうん。  
JS1 書いて、あのう、観察日記を作ってー。

(教師と学生の会話)

JS1 はボランティア活動をした時の体験を語っている。自分の体験を語っているため、情動的優位性がある。

次に学生同士の会話を見てみたい。表2の結果から、学生同士の会話では「マア」は「逆接形式」、「あいづち」と共起しやすいことが分かる。最も出現数の多い「逆接形式との共起」から検討していく。学生が発する「マア」の22.9% (8回)、友人の42.9% (15回)が逆接形式と共起するものである。

例 4-11 (JS8 と JF8 は年間の授業料について話している。)

JS8 10 だとして 70 万でしょ。で、かける 20 万。

JF8 かける 40 で 110 万。初年度 110 万プラス、あの一設備投資とかあるで、120 だよ。だいたい。

JS8 うっわー。

JF8 120 プラス△△ちゃんのだいたいいくら [ぐらい]

JS8 [60 万] でしょ。

JF8 まあでも通年して 130 万ぐらいじゃん。250 万だよ。親支払う

---

の。

JS8 やっべーな。

(学生同士の会話)

例 4-11 は「マア」が「でも」と共起する例である。JS8 と JF8 が授業料の計算をしているが、JF8の方がより詳細な内訳を示して計算している。「まあでも通年して 130 万ぐらい」は計算のプロセスあるいは根拠を述べており相手が授業料などを加算によって計算しているのに対し、「通年」という別な観点からより妥当性の高いと思える数字を出している。別な観点は相手の発想にはなかったもので、ここに視点の優位性を認めることができる。例 4-12 は同じく逆接形式と共起する「マア」の用例である。

例 4-12 (JS6 と JF6 は修士論文を書く意味について話している。)

JS6 なんか詳しく研究する力がありますよってのを証明するため  
のものとして、

JF6 うんうん。

JS6 その修士論文が書ければ、

JF6 うん。

JS6 いいと思うからって。

JF6 うん。なるほどね。

JS6 まあでもそう考えたら日本語教師としてのあれはあんま関係ない  
なって。

(学生同士の会話)

例 4-12 も「マア」が逆接形式と共起する用例である。4-12 では、JS6 と JF6 は修士論文について話している。修士論文を書く意味を述べたあと、JS6 は新しい視点（修士論文と日本語教師としての能力の関係）から「日本語教師としてのあれ（筆者注：能力）はあんま関係ない」と指摘している。ここでは「でもそう考えたら」がこれまでの会話を総合して次の意見を出したことを予告しており、聞き手が持っていない会話を総合する視点がここでのポイントであり、

---

視点の優位性につながると考えられる。

例 4-13 はあいづちの「マア」の例である。学生と教師ではあいづちの「マア」は 1 例だけだが、学生同士の会話では、学生が発する「マア」の 14.3% (5 回)、友人の 12.5% (4 回)があいづちである。

例 4-13 (JS6 と JF6 はアルバイトについて話している)

JS6 スタバなんて、ぜんぜん楽ですよ。

JF6 ほんと。

JS6 何がいいってよし牛とかコンビニと違って、ほんとに厄介なお客さんが来ない。

JF6 まあね。

(学生同士の会話)

JS6 の「何がいいってよし牛とかコンビニと違って、ほんとに厄介なお客さんが来ない」の発話に対し、JF6 は「まあね」であいづちを打つ。会話の中で「ね」を単独で発言した場合、それだけで相手の発言を肯定する意味になる。これに視点の優位性を示す「マア」が付いて「マアね」となることで、相手より優位な視点に立って肯定するという条件付きの肯定になる。これが価値を下げた上での肯定という意味を生むのではないだろうか。

学生同士の会話では、「マア」が順接と共起する数も少なくはない。(学生が発したのは 5 回 (14.3%) で、友人は 2 回 (6.3%) である。) 例 4-14 は順接と共起する用例である。

例 4-14 (JS3 と JF3 は授業に出席せず、在留資格を失いそうになった留学生についてはなしている。)

JS3 え、強制送還みたいなことはないんだ。

JF3 ほんとみんなで強制送還への道まっしぐらだね (hh) って言ってたけど、

JS3 うんー。

JF3 ま結局そういうことにはならないので。

---

JS3 あーそうなんだ。

JF3 あのう今日来てー。

JS3 うんー。

JF3 ごめんなさいと。

(学生同士の会話)

例 4-14 では、JF3 は強制送還されそうな留学生を語る際に「ま」が現れている。その留学生のその後の様子は JF3 だけが持つ情報なので、情動的優位性が認められる。その際に自分の情報を強調する気持ちで「ので」を使っていると考えられる。例 4-14 で示すように、話し手だけが持つ情報を語る際には常に視点の優位性と情動的優位性が成立している。

例 4-15 は、自分語りの「マア」の用例である。前述したように、自分語りの「マア」は特定の形式に属さないが、出現数が多かった。学生同士の会話では、学生が発する「マア」の 22.9% (8 回)、友人の 12.5% (4 回)が自分語りの「マア」である。

例 4-15 (JS7 は自分自身のことについて話している。)

JS7 いちおう自分の、育った環境

JF7 うん。

JS7 とか思うと、中国語やってるにはやっぱ適しているかなって。

JF7 あ。

JS7 まわりにね、ほら中国人の知り合いとか多いしさ。

JF7 うんー。

JF9 まあ今もそれ使って台湾とか遊びに行ってるし。

(学生同士の会話)

「(中国語を) 使って台湾とか遊びに行ってる」, これは当事者の JS7 しか知らない情報であり、情動的優位性が認められる。

ここまで自然会話の「マア」の出現しやすい形式の用例を検討してきた結果、どの形式においても「マア」の出現条件は視点の優位性、立場的優位性、情報

---

的優位性と深く関わっていることが明らかにできた。なお、「マア」が使われていないところにもこの三つの優位性が成立している場合がある。

例 4-16 (JT2 は以前カナダに生活した時の体験について話している。)

JT2 昔ね、カナダにちょっとあのう住んでたときにね、

JS2 はい。

JT2 あのう友達のうちのとなりに中国人の家族が [いた] んですね。

JS2 [はい。]

JT2 (hh)。子供たちは、

JS2 はい。

JT2 あのう幼稚園からね、[その地] 域の幼稚園に行ってますから、

JS2 [うんー。]

JS2 はい。

JT2 英語ぺらぺらなんですね。

JS2 ふんー。

JT2 親が全然英語できない。

JS2 はい。

(教師と学生の会話)

例 4-16 では、JT2 は以前カナダにいた時の話をしている。この会話では「マア」が出現していないが、教師が過去の体験を述べている点で自分語りとなっており、情動的優位性があると考える。情動的優位性がある、「マアカナダにちょっとあのう住んでたときにね」、「マアあのう友達のうちのとなりに中国人の家族がいたんですね」のように、JT2 の発話の先頭に「マア」が付加できると考えられる。ただし、優位性を感じていることは「マア」の出現の必要条件で、この条件を満たしたら必ず出現する関係ではなく、「マア」は優位性を強く意識するところに出やすい傾向がある。

上の例では、自分語りの中に「カナダにちょっとあのう住んでた時に」、「あのう友達のうちのとなりに」、「あのう幼稚園からね」のように「ちょっと」と「あのう」という遠慮を伝える言葉が何度か出現している。ここから、自分の

---

海外経験を自慢に聞こえないよう意識していることがうかがえる。自分の英語力について「親が全然できない」と発言しているのもその気持ちの表れである。つまり、自慢に聞こえないようにという警戒感が優位性を伝える「マア」の使用を抑制させたと考えることができる。

ただし、「マア」を使用するか否かの実態については、丹念な検討が必要であり、今後の課題としたい。

この節では、自然会話の「マア」について次の作業を行った。

あ) 「マア」と共起しやすい7つの形式を抽出した。

い) 各形式から複数の例文を選び、すべての例文が仮説と合致することを確認した。

次節では、大学講義の「マア」の出現傾向を考察する。

#### 4.4 大学講義の「マア」の出現傾向

自然会話では、出現しやすい形式として、逆接形式との共起、順接との共起、挿入との共起、「思う」「考える」との共起、例示との共起、あいづちとしての使用、笑いとの共起といった7つの形式を考察した。大学講義でも同じ条件で調べた。他に共起しやすい形式はなかったが、過去の体験を語る際に「マア」が出現しやすいため、「過去の体験との共起」を考察対象に入れた。なお、独話のためあいづちは見られない。

表 5 大学講義での「マア」の出現しやすい場所

	講義 A	講義 B	講義 C	講義 D	講義 E	講義 F
逆接形式	0(0.0%)	32(18.2%)	20(19.6%)	25(27.8%)	9(45.0%)	19(30.6%)
順接	0(0.0%)	15(8.5%)	11(10.8%)	13(14.4%)	1(5.0%)	3(4.8%)
挿入	0(0.0%)	11(6.3%)	10(9.8%)	23(25.6%)	1(5.0%)	2(3.2%)
「思う」	1(12.5%)	16(9.1%)	14(13.7%)	7(7.8%)	4(20.0%)	5(8.1%)
例示	0(0.0%)	4(2.3%)	3(2.9%)	4(4.4%)	0(0.0%)	4(6.5%)
過去の体験	4(50.0%)	40(23.7%)	29(28.4%)	47(52.2%)	6(30.0%)	8(12.9%)
笑い	1(12.5%)	4(2.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(5.0%)	0(0.0%)
その他	3(37.5%)	78(44.3%)	38(37.3%)	20(22.2%)	7(35.0%)	25(40.3%)
出現総数	8	176	102	90	20	62

大学講義の第一の特徴は会話に比べて「マア」が多いことである。講義 A のような「マア」が極めて少ない講義があるものの、今回収集した 6 つの大学講義の「マア」の平均出現頻度は<1.21 回/分>である（授業中動画や録音を流すなど発話のない時間を除く）。最も出現頻度の高い講義 B は<1.96 回/分>に達している。それに対し、学生同士の会話での「マア」の出現頻度は<0.50 回/分>である。教師と学生の会話では、「マア」の出現頻度は<1.45 回/分>だが、そのうちの 83%が教師が発する「マア」である。大学講義は教師が学生にとって新しい情報を教える場面で、情動的優位にあるとともに、教師は学生に対し立場的にも優位である。つまり、大学講義での教師の発話は、常に優位性が伴っている。これが大学講義で「マア」が頻出することの背景だと考えられる。

表 5 を見ると、大学講義の「マア」の出現数には、個人差がかなり大きいと言えるが、出現しやすい場所は共通している。それは次のような場所である。

- 
- ・ 逆接形式と共起する時
  - ・ 自分の体験を述べる時
  - ・ 挿入と共起する時
  - ・ 「思う」「考える」と共起する時

そして、「その他」の割合もかなり高いと言える。「思う」「考える」との共起を除いて、いずれも自然会話と同じ傾向である。これら出現しやすい形式の「マア」の実際の用例を見てみたい。まずは逆接形式と共起する「マア」である。

例 4-17 (教師は授業の初めに、授業の説明をしている。)

えっと後ろ聞こえますか。えっと私ライティングセンターの△△です。えー今日はですね、えー、第 8 章ということなんですけれども、まあ皆さん章の順番に習っているかどうか分かりませんがけれども、えーアカデミックライティングというのがテーマです。えーで最初にちょっと資料の確認をします。

(大学講義 C)

例 4-17 では、「まあ」の発話の前と後に「けれども」が付いている。「まあ」の発話は挿入節の最初に置かれて、それまでにはない視点から情報を補っている点で、視点の優位性が認められる。(章の順番に習っているかは分からないというそれまでの流れとは異なる情報を補足している。)

逆接形式と共に、大学講義の「マア」の最も出現しやすい形式として、過去の体験との共起が挙げられる。例 4-18 は過去の体験と共起する「マア」の用例である。

例 4-18 (教師は自分が大学を受けた時の体験を述べている。)

今思い返してみると、その一僕が大学を受ける時、の、ま、キーワードっていうのが、ま先生にはちょっとなりたかった、ですね。

(大学講義 D)

---

例 4-18 の発話の内容は教師自身の体験であり，教師しか知らないという情報の優位性がある。

次は「マア」が挿入と共起する用例を確認したい。例 4-19 は「マア」が挿入と共起する例である。

例 4-19 （教師は昔の言葉は地域の方言に残っていることについて話している。）

で，えっと地域に，周辺地域に残ってる言葉ほど，古い語形が残っている，ということになります。ですよね，こっちの方が変化が早いわけですから。こちら変化が起こったのが，伝わった頃には，次の変化が起こっている，ということなので，順，番として，こっちの方が新しい語形になりますよね。で，ですから，その一，例えば九州とか，東北ま僕は九州なんですけれども，の方言の中には，割と昔の言葉が残ってますよ，ですよね。

（大学講義 D）

例 4-19 では，教師は東北の方言に昔の言葉が残っていることを語る際，「ま僕は九州なんですけれども」を挿入している。挿入された自分の出身地の情報は話し手のだけが持つ情報で，情報の優位性がある。

逆接形式との共起，過去の体験との共起，挿入との共起と共に，「思う」「考える」と共起する「マア」も高い割合を占めている。例 4-20 は「思う」が「マア」と共起する用例である。

例 4-20 （教師は授業のテーマである言葉と文化について話している。）

何で日本人はあんなに行列してまでラーメンを食べたいんですか。これは答えられないですよね。(hh) じゃその食べたいから食べたい。でもそういう普段，当たり前のようにしていること話していること空気のような存在の言葉とか文化というものを，まこれこの授業通しての，あの共通してるテーマだと思うんですけれども，そういう外の面によ

---

って気づかされるわけですね。

(大学講義 D)

例 4-20 では、教師は言葉と文化の関係を説明する際、「まこれこの授業通しての、あの共通してるテーマだと思うんですけども」という補助的情報を挿入している。ここでは、「思う」によって自分の考えであることが強調されている。

「この授業通しての、あの共通してるテーマ」、この発言は、これまでとは異なる「授業全体を通して」という視点に立っている。一方通行の講義の場合、聞き手との比較ではなく、これまでの講義の流れとの比較となり、これまでの話にはなかった新しい視点に立つことで、視点の優位性があると考えられる。

表 5 から「マア」の出現しやすい 7 つの形式が分かるが、それ以外にも「その他」の割合がかなり高い。それは形式面では一定の特徴を見出しにくい「マア」である。このような「マア」の用例を内容から考えてみたい。

例 4-21 はヨーロッパ史の授業で「マア」が出現する用例である。

例 4-21 (教師は第一次世界大戦でのドイツの敗戦について話している。)

えー、レジュメの所にあるように 6 月 28 日に国民議会は調印せざるを得なくて調印します。でそれを何かということですね。えー、まあこ、ドイツ国民に大いなる不満と打撃を与えることになったんです。で何かというと、ですね、えー領土の割譲、それから武装解除、おー賠償負担、植民地の喪失っていうことですね。

(大学講義 B)

例 4-21 において、教師はドイツの戦敗を説明する際、「国民議会は調印せざるを得なくて調印します。でそれを何かということですね。」と述べ、その解釈として「えー、まあこ、ドイツ国民に大いなる不満と打撃を与えることになったんです。」と述べている。大学講義ではこの例のように重要な解釈の先頭に「マア」が出現することがある。本稿の第 3 章において視点の優位性を次のように規定した。「相手に見えていないものが見えており、それが重要であると感じている。」これは会話を前提とした規定であり、大学講義では、視点の優位性が学生

---

の注意を促すといった意図で使われることが多い。「相手に見えていないもの」が「学生が見落としていること」、「学生が重要さに気づいていないこと」といった形になり、注意を促す意図で使われると考えられる。これが、重要な箇所「マア」が出現しやすい背景だと考えられる。

例 4-22（教師は方言周圏論について説明している。）

ですからさっき見たのは、東西で分布が違うっていう話でしたけれども、例えばこういうカタツムリの分布に関しては、東西というふうに綺麗になってない、ですね。じゃあ、どういう分布になっているのかというと。こういう、近畿、近畿地方で分布しているもの、もあれば、こういう近畿を中心としてこの周辺に分布しているものもある、わけです。でこういうのを、方言周圏論、まあ周圏的な分布というふうに言います。

（大学講義 D）

例 4-22 では、教師は「（筆者注：方言は）近畿を中心としてこの周辺に分布しているものもある、わけです。」と述べたあと、「方言周圏論」という語を出している。しかし、この言葉は専門的で分かりにくいいため、その後に「まあ周圏的な分布というふうに言います。」という説明を補足している。ここでの「まあ周圏的な分布というふうに言います。」は典型的な言い換えで、授業の流れを見て、その中の分かりにくい部分もしくは追加の説明が必要と感じる部分に対して補足、言い換えることが「マア」の出現に関わっていると考えられる。

例 4-23（教師は授業の内容について説明している。）

えー、今言ったトピックセンテンスとコンクルーディングセンテンスの組み立てですね、それとこの、例えばこの以上のようにみたいなの、えーサインポストですね。そういうのが、効果的に、に一使うと、いうことがまあこの授業のまあ主なえー内容です。

（大学講義 C）

---

例 4-23 では、教師は授業の内容を説明する際、「まあ」を 2 回使っている。ここでの「まあ」は、今までの内容を授業全体を見通した上でまとめる発言の中に現れている。

大学講義において、特定の形式と共起しない「マア」は例 4-21, 22, 23 のように、補足説明や言い換え、発話内容のまとめの先頭に立つことが多く、これらの発話は聞き手（学生）に見えていないものであり、このような場所に出現する「マア」は、視点の優位性が認められる。

この節では、大学講義の「マア」について次の作業を行った。

あ) 「マア」と共起しやすい 8 つの形式を抽出した。

い) 用例数の多い逆接、挿入、「思う」との共起及び「その他」の形式から複数の例文を選び、すべての例文が仮説と合致することを確認した。

本節と前節で個々の例文と仮説の関係を確認した。次節では、「マア」と共起しやすい形式について、「マア」と共起する必然性のあることを述べたい。

## 4.5 「マア」が出現する必然性

本節では、「マア」の出現しやすい優位性との間に必然的な関係のあることを述べ、仮説の妥当性の検証をさらに進めたい。第 3 章で提出した「マア」に対する仮説は次のようなものである。

「マア」は話し手が立場的優位性、視点の優位性、情動的優位性のいずれかを感じる場所に出現する。

仮説では三つの優位性を並列しているが、立場的優位性と情動的優位性は外的要因から決定されるので、例文が条件に合うことは比較的簡単に確認できる。文脈による確認が必要なのは視点の優位性である。本節では、「マア」との共起が突出して多い形式である逆接を中心に、「マア」と共起しやすい必然性のあることを述べたい。

「マア」の出現しやすい状況を確認してみたい。

表 1 学生と教師の会話での「マア」の出現形式

	学生	教師
逆接形式との共起	14 (42.4%)	59 (36.2%)
順接との共起	0 (0.0%)	19 (11.7%)
挿入との共起	2 (6.1%)	12 (7.4%)
「思う」「考える」との共起	1 (3.0%)	5 (3.1%)
例示との共起	0 (0.0%)	6 (3.7%)
あいづちとしての使用	0 (0.0%)	1 (0.6%)
笑いとの共起	1 (3.0%)	13 (8.0%)
その他	10 (30.3%)	80 (49.1%)
「マア」の出現総数	33	163

表 2 学生同士の会話での「マア」の出現形式

	学生	友人
逆接形式との共起	8 (22.9%)	15 (42.9%)
順接との共起	5 (14.3%)	2 (6.3%)
挿入との共起	1 (2.9%)	4 (12.5%)
「思う」「考える」との共起	3 (8.6%)	2 (6.3%)
例示との共起	0 (0.0%)	0 (0.0%)
あいづちとしての使用	5 (14.3%)	4 (12.5%)
笑いとの共起	3 (8.6%)	4 (12.5%)
その他	12 (34.3%)	11 (34.4%)
「マア」の出現総数	35	32

表 5 大学講義での「マア」の出現しやすい場所

	講義 A	講義 B	講義 C	講義 D	講義 E	講義 F
逆接形式	0(0.0%)	32(18.2%)	20(19.6%)	25(27.8%)	9(45.0%)	19(30.6%)
順接	0(0.0%)	15(8.5%)	11(10.8%)	13(14.4%)	1(5.0%)	3(4.8%)
挿入	0(0.0%)	11(6.3%)	10(9.8%)	23(25.6%)	1(5.0%)	2(3.2%)
「思う」	1(12.5%)	16(9.1%)	14(13.7%)	7(7.8%)	4(20.0%)	5(8.1%)
例示	0(0.0%)	4(2.3%)	3(2.9%)	4(4.4%)	0(0.0%)	4(6.5%)
過去の体験	4(50.0%)	40(23.7%)	29(28.4%)	47(52.2%)	6(30.0%)	8(12.9%)
笑い	1(12.5%)	4(2.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(5.0%)	0(0.0%)
その他	3(37.5%)	78(44.3%)	38(37.3%)	20(22.2%)	7(35.0%)	25(40.3%)
出現総数	8	176	102	90	20	62

表全体から導かれる大きな特徴として、次の二つが挙げられる。

- あ) 学生同士、学生と教師の会話を比べると、教師が学生に対して発する「マア」が多い。
- い) 自然会話に比べて大学講義での「マア」が多い。

学生と教師の会話では教師の立場的優位性が保たれており、大学講義では教師の優位性が確保されている。つまり、あ) とい) の結果は立場的、情動的優位性の仮説に合致すると考えられる。

次は出現しやすい環境について考える。まず、逆接形式との共起である。修辞学では逆接が複眼的見方を前提とする形式であることが、以前から指摘されている。二つの相反する考えを結ぶ形式が逆接だからである<sup>4)</sup>。逆接の複眼的見方とは、逆接以前の会話内容（論理）を異なる内容（論理）と比較する見方

<sup>4)</sup>逆接に関して、柳澤(2000)はアメリカの修辞学者リチャード・ウィーバー(R. M. Weaver, , 1953)を引用し、以下のように述べている。

---

ということになる。ここでの異なる内容とは、多くの場合、これまでの話になかった別の角度からの内容ということになるだろう。つまり、逆接の多くは視点の優位性を満たす、新たな気づきの登場する場所となり、逆接は視点の優位性を感じることの多い場所と言える。

逆接形式と共起している用例を引用してみたい。

例 4-24 (JT6 と JS6 は学校の施設は足りるかどうかにについて話している。)

JT6 だから食堂，そうですね。もっとあったほうがいい [ですね]。

JS6 [ですよ] (hh)。

JS6 でもここの大学はほんとに、なんか設備はどんどんどんどん整えて、  
てるじゃないですか。

JT6 まあでもあのう学芸も [できたし]，学生は，増えてますよね。

JS6 [そうですね]，ほんとうに (hh)。

(例 4-1 再掲)

例 4-25 (JS6 と JF6 は修士論文を書く意味について話している。)

JS6 なんか詳しく研究する力がありますよってのを証明するため  
のものとして、

JF6 うんうん。

JS6 その修士論文が書ければ、

JF6 うん。

JS6 いいと思うからって。

JF6 うん。なるほどね。

---

彼 (リチャード・ウィーバー) は逆接の表現効果について考察の中で次のように述べている。「重文の節をつなぐために but を頻繁に使うことは、(書き手の) ある心理的な癖の表現を感じさせる。But は『兼ね合いを考慮した見方』の持ち主、すなわち、(確かだと) 保証されるまで、あるいは消去法から何らかの認識が作られるまでは、安易に断定しない人にふさわしいと分かつ。 (中略) 一言にいえば、逆接は複眼的見方を感じさせる形式ということである。(柳澤 2000 : 161-162)

---

JF6 うん。

JS6 いいと思うからって。

JF6 うん。なるほどね。

JS6 まあでもそう考えたら日本語教師としてのあれはあんま関係ないなって。

(例 4-12 再掲)

例 4-24 と 4-25 はどれも逆接形式と共起する用例であるが、4-24 は根拠を示して相手に反論する発話で、意味的に逆接となっているのに対し、4-25 は自分の考えを補足するものである。4-24 では、逆接によって相手の意見に対する反論が導かれており、その先頭に「まあ」がある。この例では相手の気づいていないことが反論の根拠としてあげられている。また、4-25 は、会話の流れを変える発言を逆接が導いている例で、その先頭に「まあ」が現れている。ここでは「そう考えたら」を付けることで自分の意見の新しさが強調されている。

「マア」は特定の語、特定の文法形式と共起することが少なく、様々な形式と広く対応する語と言える。ただし、逆接だけは例外で、自然会話と大学講義のいずれにおいても多くの「マア」が逆接と共起する。先に述べた通り、逆接は新たな気づきの登場しやすい場所であり、視点の優位性を満たしやすい場所である。従って、「マア」が逆接と共起しやすいことは、本稿の仮説の有効性を示す有力な材料になると考える。

逆接以外の形式では、大学講義において挿入との共起がやや多く見られる。文の中に異質の要素を入れ込む挿入は、文と異質の要素の両方を見ることが前提であり、二つのものを同時に見る視点を前提とする形式と言える。その例を確認してみたい。

例 4-26 (JT3 はインドネシアの治安状況について話している。)

JT3 なんかジャカルタは、インドネシアもあまりこう、まあ銃もちろんだめなんですけども。

JS3 はい。

JT3 ナイフでどうのとかもあんまりなくて。

---

JS3 ふーん。

JT3 いない，空き巣ねらいとかのほうが多くて。

JS3 へー。

JT3 いわゆる強盗は少なくて。

JS3 あ，そうなんですか。

(例 4-5 再掲)

例 4-26 では，ナイフが凶器になりえることを話す中で，ナイフと類似した銃について考えて「**まあ**銃もちろんだめなんですけども」が挿入されている。このように，挿入も複眼的な見方を前提としていることから，「マア」が現れやすい形式になると考えられる。

一方，共起する用例数は多くないものの，「マア」と共起しやすい語の一つに「思う」「考える」がある。どちらも自分の意見を客観的に見る視点が背景にあり，視点の優位性と結びついている。また，音声的特徴による「マア」の使い分けを検討する次の 5 章では，音の延伸を伴う「まあ」が出現する典型的な場所として，会話の中で中心的な主張を行う場所，あるいは話の流れを変える場所をあげる。どちらも，相手に見えていないものを述べる発言で，視点の優位性があると考えられる。

このように，「マア」の現れやすい場所には，いずれも立場的優位性，視点の優位性，情動的優位性とつながっている。この事実は，仮説の妥当性を主張する有力な根拠となるだろう。

---

## 第5章「マア」の音声

---

## 5.1 「マア」の音声的特徴

本章では「マア」の音声的特徴とそれによる使い分けの可能性を考えてみたい。「マア」の発音は様々であるが、延伸を伴う「まあ」と延伸しない「ま」に区別される。そして、文字起こしした資料を見ていくと、延伸を伴う「まあ」と延伸しない「ま」の間には、何らかの使い分けが存在する可能性があると考えられる。それは例えば、学生と教師の会話において、教師が「まあ」を多用し「ま」をあまり使わないのに対して、学生は「まあ」全体の使用数を減らした上で「まあ」よりも「ま」を使用する傾向の見られること。あるいは、発話場面（自然会話か講義か）、発話者（学生か教師か）といった違いに関係なく、「ま」については従属節や補足的な内容に出現しやすい傾向の見られることなどである。ただし、これらはあくまで観察によるものであり、音声の特徴、出現傾向の両方について慎重に検討する必要がある。本章では次の二つについて検討していく。

- 1) 「マア」の発音を Praat を使って客観的に把握する。Praat を使うことで発音の長さや高さの変化（ピッチ）を正確に把握することができる。
- 2) 音声的特徴による「マア」の使い分けが存在するとすれば、
  - 使い分けの実態は何か
  - どのような音声的特徴によって使い分けられているか

本章では、母語話者にとって自然な区別である、延伸を伴う「まあ」と延伸しない「ま」という区別から出発し、次の手順で検討していきたい。検討は延伸を伴う「まあ」から始める。

- (A) 延伸を伴う「まあ」について、偏りが生じないよう多様な用例を抽出する。多様な用例とするために次の二点に注意する。
  - a) 教師の発話と学生の発話から選ぶ。
  - b) 共起する文法形式などを多様にする：逆接、挿入、例示、あいづち、笑い、自分語り等から広く選ぶ。

---

(B) これらの「まあ」を文脈を踏まえて検討し、延伸を伴う「まあ」に共通する出現傾向を次の観点から明らかにする。

- a) 音声的特徴を一つにまとめることが可能で、さらに出現傾向が一つであれば、「まあ」を下位区分する必要がなく、延伸を伴う「まあ」の出現傾向としてまとめる。
- b) 「まあ」に複数の出現傾向が存在した場合、出現傾向と音声特徴との対応関係の可能を探り、「まあ」をさらに下位区分する可能性を考える。

延伸を伴う「まあ」を検討した後、延伸しない「ま」を同様に検討していく。  
延伸を伴う「まあ」の具体的な用例から見ていきたい。

例 5-1 (JS8 は話の途中で言いたいことを忘れた。)

JS8 (hh)。なんだろ、あのね。(4.0) うーんとね。(hh)。

JF8 なに？言え。言え。

JS8 ごめん。何はなそうかな、わすれちゃ。何はなすか忘れた。

JF8 最低。まあでも、今日はハイの鼓動を感じてくるよ。

JS8 いいよ。じゃほんと、一回うったら。

JF8 一回勝負しな。

JS8 一回打ってだまらせるよ。まじで。

(学生同士の会話)

JF8 の「まあ」の部分を Praat で音響分析を行った。分析の結果を図 1 で示す。

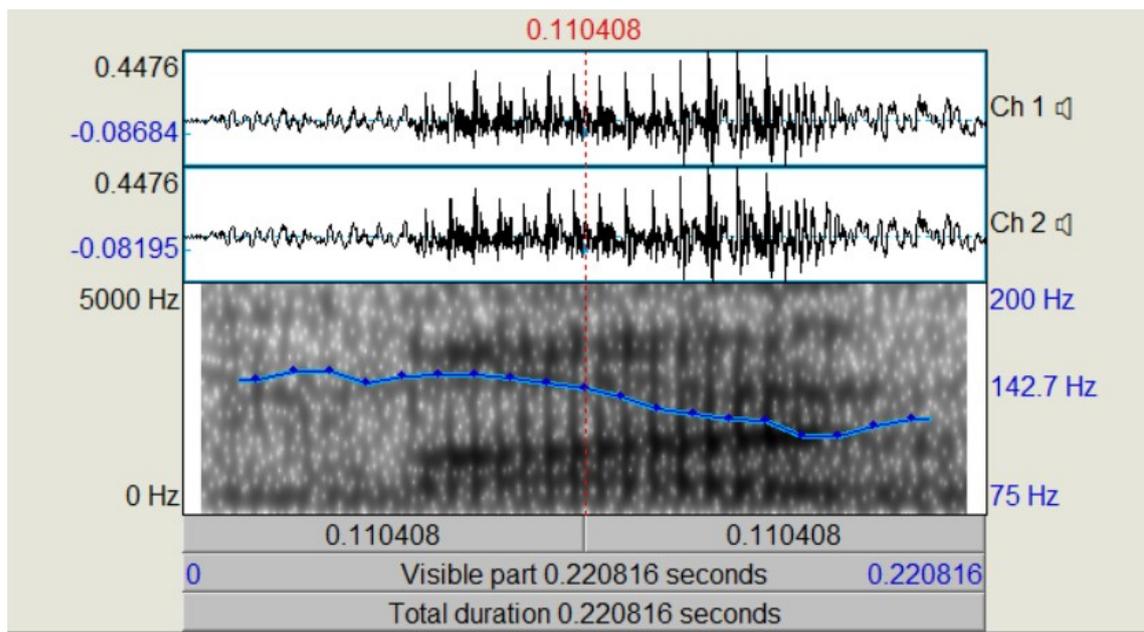


図 1. 例 5-1 の「まあ」の韻律

図の一番下の行に書かれた数字（0.220816seconds）は発音の時間である（約 220ms）。例 5-1 は逆接と共起する「まあ」で、時間は比較的長く、イメージとしては 2 モーラである。発話の文脈を見ると、例 5-1 は学生が友人に対して発する「マア」であり、話の途中で言いたいことを忘れた JS8 に対して、JF8 は「最低」と述べた後「まあでも、今日はハイの鼓動を感じてくるよ」で話の流れを変えて新しい話題を出している。この「でも、今日はハイの鼓動を感じてくるよ」は話題を変える発言で、その先頭に「まあ」が現れている。

例 5-2 （もうすぐ日本語教師になる JS4 に JT4 は経験を伝授している。）

JT4 なかなか、ねえ、当然国語も教えるわけ、[だろうか]ら、そうすると、  
ねえ、日本語きょう、教育だけじゃないです

JS4 [うーんー。]

JT4 よね。なんかその生活面での指導もあるだろうし、なかなかやっぱり、  
大変ですよ、教育現場もきつとね。

JS4 うんー。

JS4 そうです [ねえーーー。]

JT4 [うんーーーー] ーー。

JS4 うん。

JT4 まあ、ねえ頑張ってください (hh)。もう私もなんか、もう日々、勉強  
っていうか (hh)。

(教師と学生の会話)

例 5-2 の「まあ」の韻律を図 2 で示す。

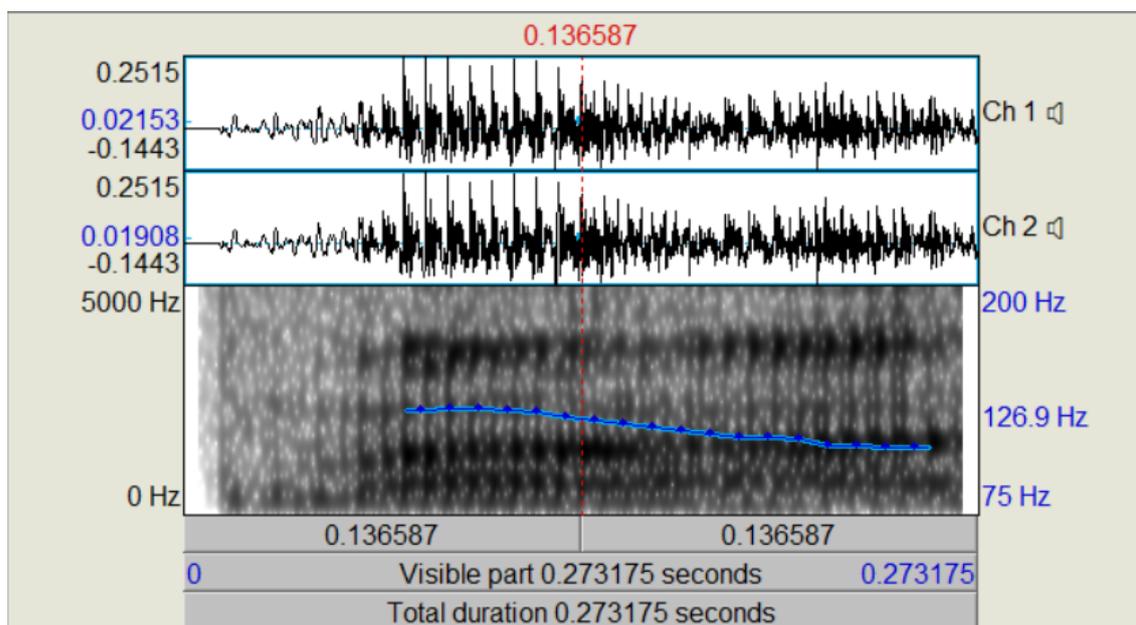


図 2. 例 5-2 の「まあ」の韻律

例 5-2 の「まあ」の時間は比較的長く約 270ms で、最初は平板になってその後ピッチが下がる。例 5-2 の「まあ」は笑いと共に起るもので、JT4 は「なんかその生活面での指導もあるだろうし、なかなかやっぱり、大変ですよ、教育現場もきつとね」と述べて、二人があいづちをうった後 JT4 は今までの話を「ねえ頑張ってください」という文でまとめており、この文（単文）の先頭に「まあ」が現れている。

例 5-3 (JT5 は以前留学のことである先生と相談したことについて話している。)

JT5 で、簡単な先生でしょ、その先生も (hh)。

JS5 うんうんうんうんうんー。

JT5 大丈夫かもしれないよとか言われて、[えー]とか思ってたんだけど。

JS5 [はい。]

JS5 はい。

JT5 で、その先生が、留学するのもいいけど、僕の知ってる限りでは留学してあまり、上手になって帰ってきた人は (hh)，あんまりいないから (hh)。

JS5 はい。

JT5 まあ遊んじったりしてね。

(教師と学生の会話)

例 5-3 の「まあ」の韻律を図 3 で示す。

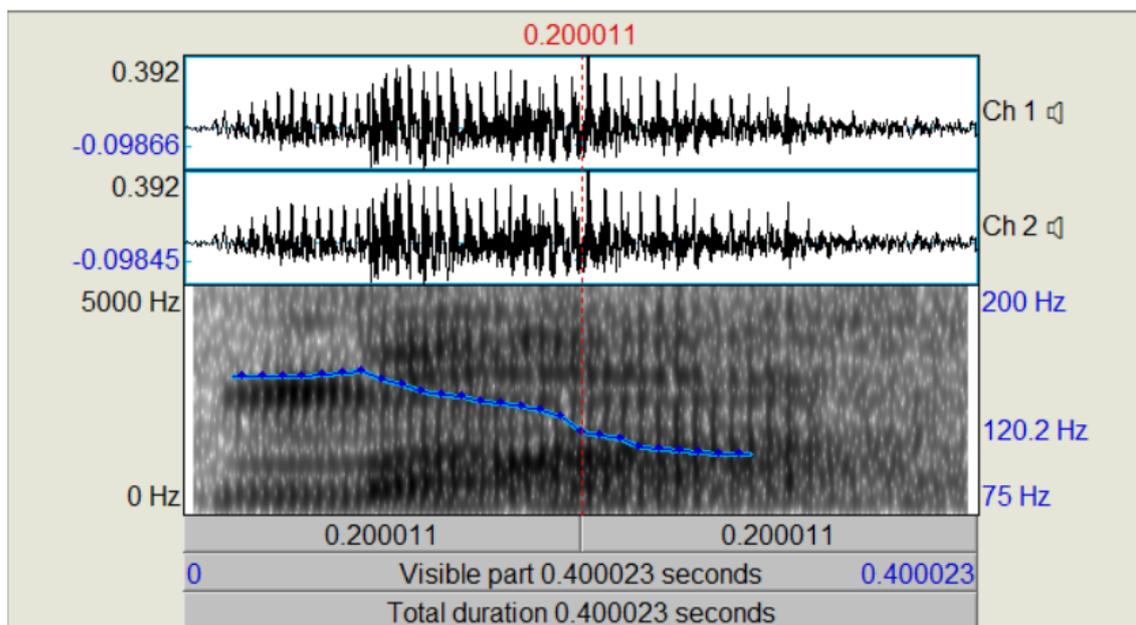


図 3. 例 5-3 の「まあ」の韻律

例 5-3 の「まあ」のピッチは最初やや上がる傾向で、途中から下がっていく。時間は約 400ms と長い。例 5-3 は教師が発する「まあ」で、笑いと共起している。JT5 は学生の「はい」を挟んで、「留学するのもいいけど、僕の知ってる限りでは留学してあまり、上手になって帰ってきた人は、あんまりいないから、

---

まあ遊んじゃったりしてね。」となっている。「僕の知ってる限り」から分かるように、聞き手の気づいていない発想と情報にもとづいた発言であり、これが「まあ」を出現させたと考えられる。

例 5-4 (JT6 と JS6 は日本語教育専攻の院生の人数について話している。)

JS6 今M1, ですね。日本人だけだと、正規でちゃんと入った人は4人だけですね。[3人]が学部から来た人で、1人が、あのー

JT6 [ええ。]

JS6 主婦の方が。

JT6 あ、そう [ですか。]

JS6 [もう教]授経験のある人が [来て、勉強]されてて。で、そのうち今2人が、あのうタイ行って、ベトナム行ってた子が

JT6 [うーんー。]

JS6 戻ってきてまたそこに参加してるって感じ [ですけど。]

JT6 [あー。]

JT6 まあでもそのぐらいがちょうどいい数ですね。

(教師と学生の会話)

JT6 の発話の「マア」の部分を Praat で音響分析を行った。分析の結果を図 4 で示す。

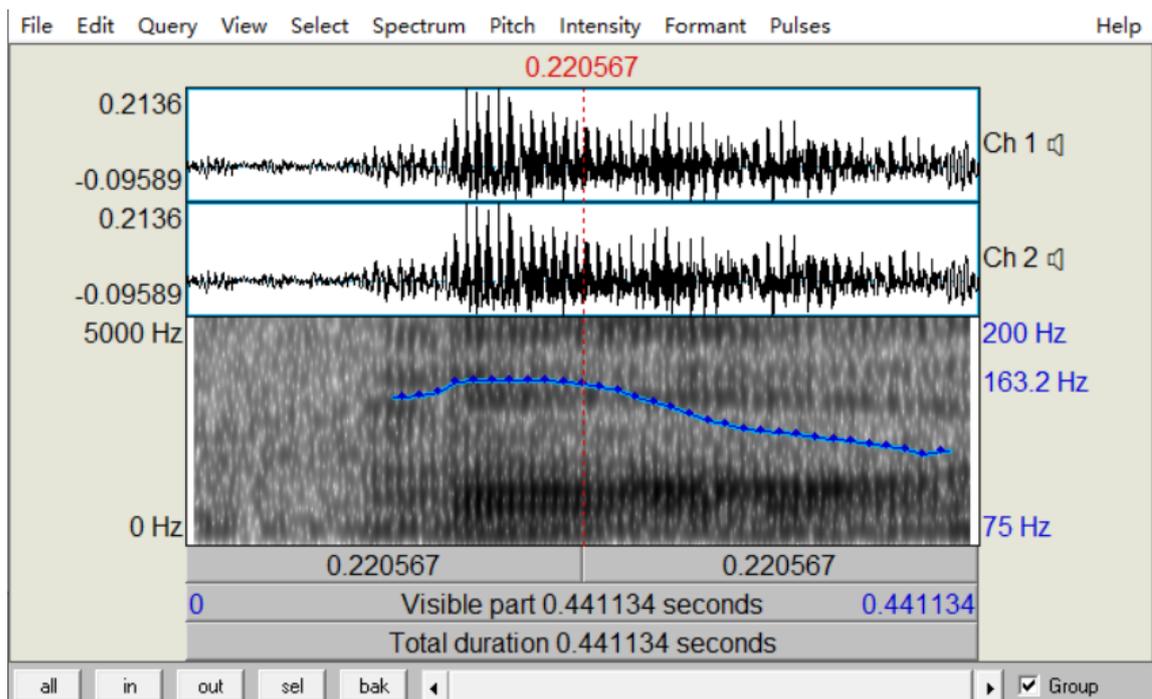


図4. 例5-4の「まあ」の韻律

例5-4では、日本語教育専攻の院生の人数について、JS6は「正規でちゃんと入った人は4人だけですね」と述べて、人数が少ないことを示している。それに対して、JT6は「まあでもそのぐらいがちょうどいい数ですね。」と述べている。これはJT6が長年教師をやって、その経験からの判断である。そして、この「まあ」はそれまでの会話の流れを変える発話に現れている。図4の発音時間を見ると、「まあ」の発音が長いことが分かる（上図では約440ms）。ピッチ曲線を見ると、最初にわずかに上がり、その後伸びながら下がっていくことが分かるが、音声を見た場合、上がる部分は気づかれにくく、全体的には発音が高低の発音パターンというイメージになる。

例5-5（JT1は稟議書について説明している。）

JT1 そう書き込んでいけば [いいんです。] そうそうそうそう。

JS1 [書き込んでいて、]

JT1 うん。

JS1 で、まとめる人がいれば、

JT1 うん。

JS1 それ、

JT1 そう。で、まある程度みんなの意見が出つくしたところで、まあ例え  
ば大多数の意見はこのようですので、でこのようにしたいと思いま  
す。で、異議のあるかただけは、例えば何月何日何時までに、あの、  
メールでお知らせくださいと。

JS1 はい。

(教師と学生の会話)

例 5-5 の「ま」と「まあ」の韻律を図 5 と図 6 で示す。

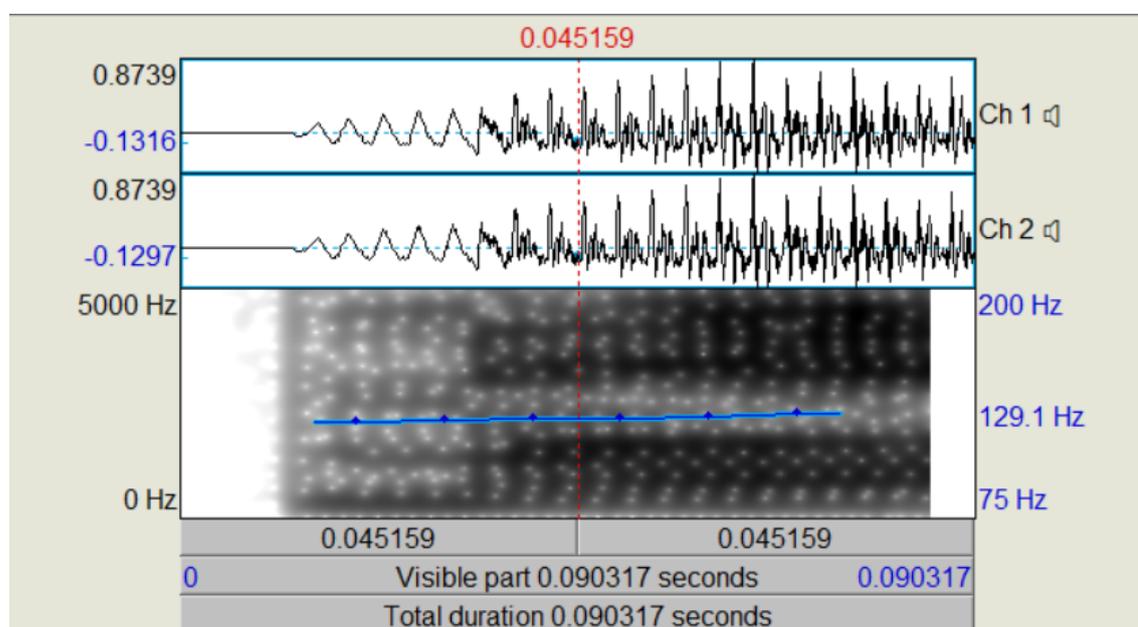


図 5. 例 5-5 の「ま」の韻律

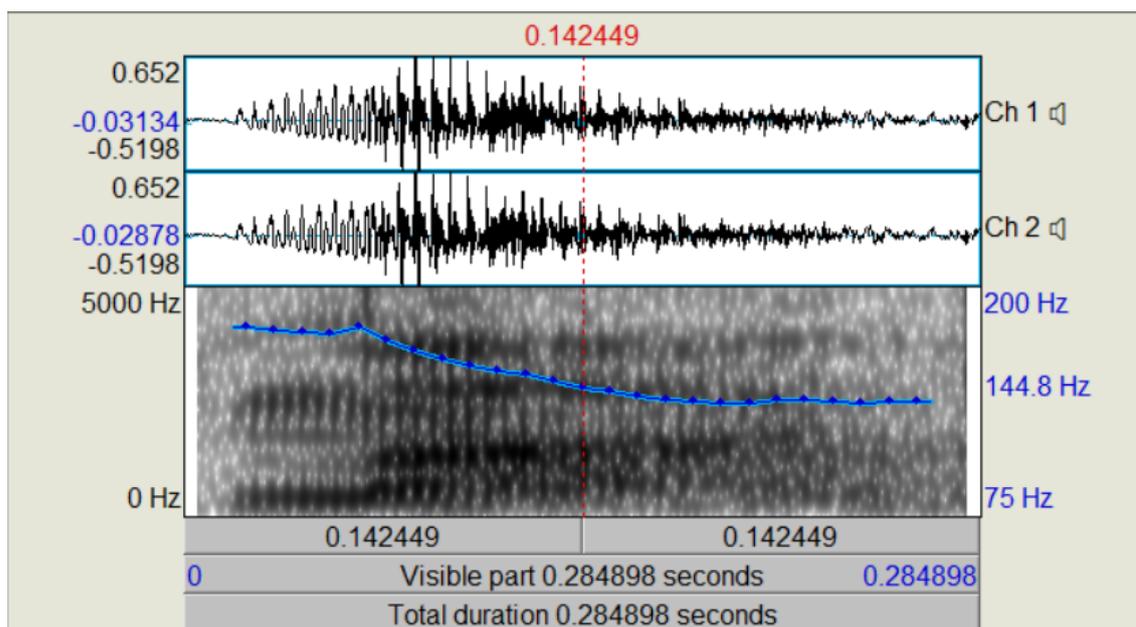


図 6. 例 5-5 の「まあ」の韻律

例 5-5 の「ま」と「まあ」はどれも教師が発するものである。「ま」は例 5-1～5-4 の「まあ」とは異なり、平板型である。時間は約 90ms しかない。5-5 の「まあ」は例示と共起するもので、5-1～5-4 の「まあ」と同じく最初は平板型、その後ピッチが下がる。時間は約 280ms である。例 5-5 では JT1 が稟議書について説明をする場面に「ま」と「まあ」が出現している。「そう。で、まあ程度みんなの意見が出つくしたところで、まあ例えば大多数の意見はこのようですので、でこのようにしたいと思います。」の文は、「ま」が「ところで」で終わる重文の従属節の先頭に立っている。一方、「まあ」は「例えば」で始まる主節の最初に立っている。この発言の最後に置かれた「と」が気になる。「まあ例えば」から「お知らせください」までが引用になっている。説明の中に引用を入れて臨場感を上げているわけで、引用を入れて語りを立体的にするためには複眼的な視点が求められる。

延伸を伴う「まあ」についてのここまでの考察をまとめると次のようになる。「まあ」は会話を総括したり、会話の流れを変えたりする主要な発言に立つことが多い。形式的には単文が多い。複数の文をまとめるような位置に立つこともある。

次に延伸しない「ま」の用例を考えてみたい。

例 5-6 は例 5-5 の「ま」と同じく延伸しない「ま」の用例である。

例 5-6 (二人は授業に出ない留学生のことについて話している。)

JS3 え、強制送還みたいなことはないんだ。

JF3 ほんとみんな強制送還への道まっしぐらだね (hh) って言ってたけど、

JS3 うんー。

JF3 ま結局そういうことにはならないので。

JS3 あーそうなんだ。

JF3 あのう今日来てー。

JS3 うんー。

JF3 ごめんなさいと。

(学生同士の会話)

例 5-6 の「ま」の韻律を図 7 で示す。

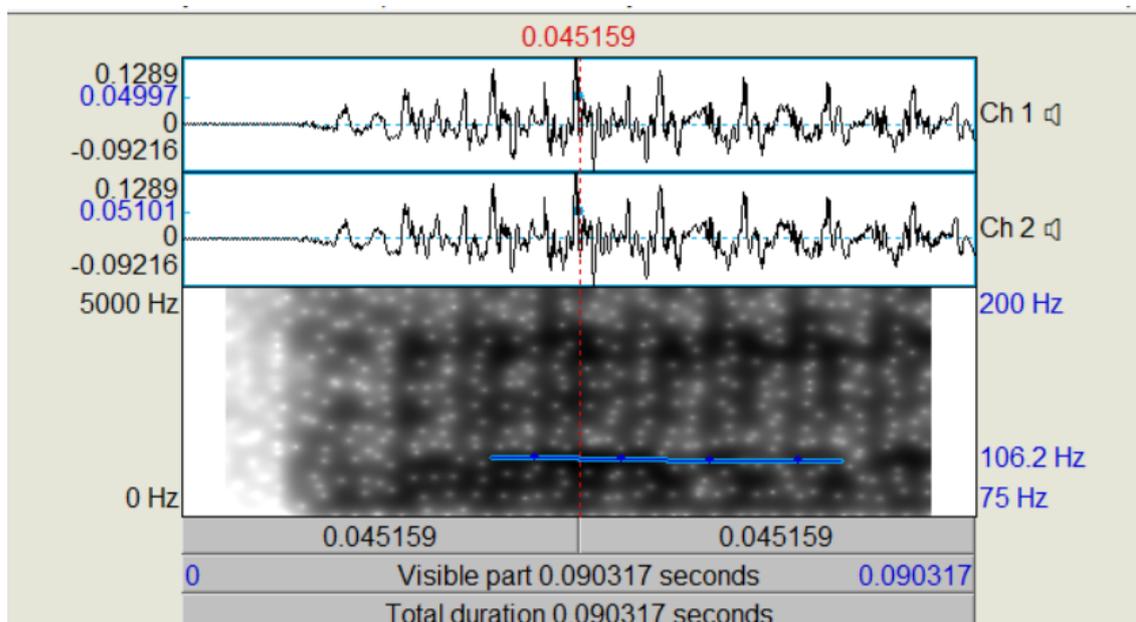


図 7. 例 5-6 の「ま」の韻律

例 5-6 は学生が発する順接の「ので」と共起する用例である。この「ま」のピッチ曲線は平板型で、時間は約 90ms である。例 5-6 の「ま」は例 5-5 の「ま」

と同じく従属節の前に出現している。そして「ま」が導く「結局そういうことにはならないので」はその後の「あのう今日来てー，ごめんなさいと」の背景を示す従属節に立っている。

例 5-7 (JS1 はセミナーの実行委員長をやるのがつらいことについて話している。)

JS1 いい経験だと思います (hh)。

JT1 そう。でもちょっと悲しかったのね。

JS1 悲しいっていうか，わかってくれない [かな]。まわかってくれないの当たり前なんですけど。

JT1 [うん。]

JT1 うん。

(教師と学生の会話)

例 5-7 の「ま」の韻律を図 8 で示す。

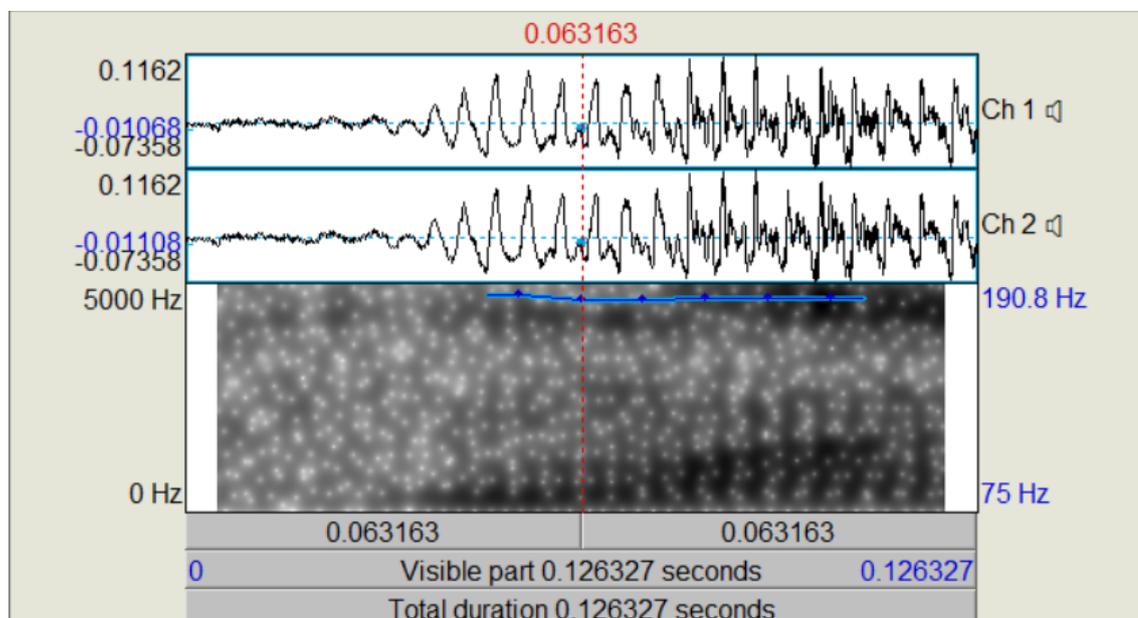


図 8. 例 5-7 の「ま」の韻律

例 5-7 の「ま」は平板型で，時間は約 120ms である。ピッチ曲線，長さとも例

5-5, 5-6 の「ま」に近い。例 5-7 の「ま」は学生が発するもので、「悲しいって  
うか、わかってくれない」という自分の意見を自虐的に補足する文の先頭に  
現れている。

例 5-8 (教師は方言圏論について説明している。)

ですから、方言圏論という考え方があって、都で生まれた言葉っていう  
のはま文化の中心地、都で生まれた言葉が、その日本の、その周辺地域に広  
がっていく同心円状に広がっていく。で、その広がった時には、次の新しい  
語形変化が都で起こっている。

(文系講義 D)

例 5-8 の「ま」を Praat で音響分析した結果が図 9 である。

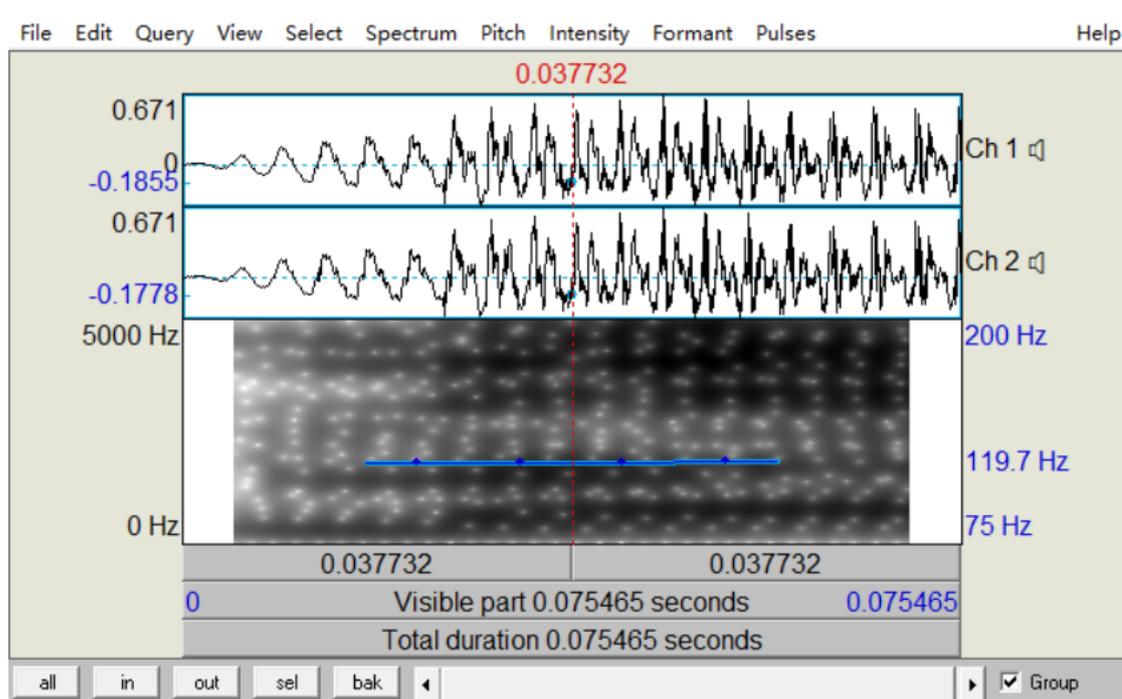


図 9. 例 5-8 の「ま」の韻律

例 5-8 では「都で生まれた言葉っていうのは」という発話に対し、「ま文化の中心地、都で生まれた言葉が」という補足的な内容を挿入している。この補足的な内容である従属節の先頭に「ま」が立っている。例 5-8 の「ま」の発音時間

---

はごく短い（上図では約 75ms）。また、ピッチ曲線を見ると、「ま」の曲線は下がらず、ほぼ平板になっている。

例 5-5～5-8 は延伸しない「ま」の用例である。これらの「ま」は発音時間は約 100ms 前後で、ピッチ曲線は平板型となる。これに対し、延伸はしないが、ピッチが下がり、発音時間がやや長い（約 150ms 前後）「マア」が存在している。つまり、延伸しない「ま」の中に二種類の発音の形が存在することになる。一つはピッチが平板で発音時間が約 100ms のもので、もう一つはピッチが下がって発音時間が約 150ms のものである。本稿では、この二つを別な形式として検討作業を進める。

次に「まぁ」の用例を見てみたい。

例 5-9（JT1 は稟議書について説明している。）

JT1 稟議書っていうのは、会社で例えば、あの会議で何かを決定するときに、

JS1 はい。

JT1 全て会議のときに話し合っていたら時間がないですよ。

JS1 はい。

JT1 ですからあらかじめ、こういうふうなことでっていう、まぁ情報を皆さんに渡して、実際に会うのではなくて紙面の上で、あのお会議を行って、ある程度決断を行ってしまうってのが稟議なんです。

（教師と学生の会話）

例 5-9 の「まぁ」の韻律を図 10 で示す。

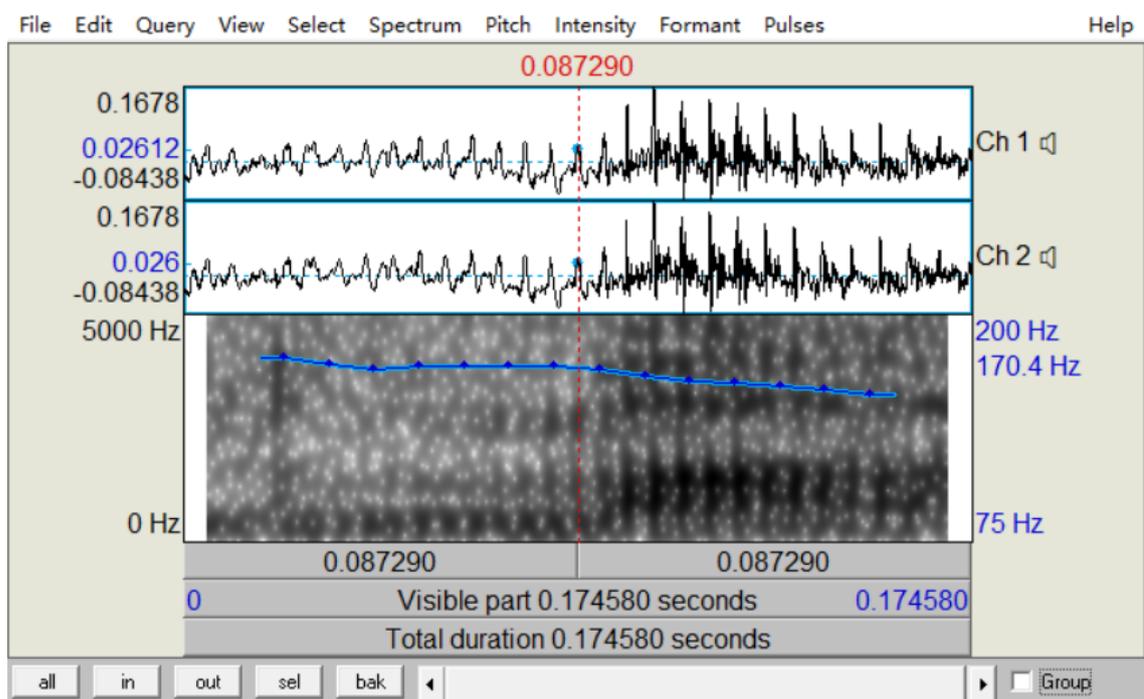


図 10. 例 5-9 の「まあ」の韻律

例 5-9 の「まあ」のピッチは平板型の「ま」とは違い、最初から下がっている。時間は約 170ms で、長さは「まあ」と「ま」の中間的である。例 5-9 では JT1 は稟議書について説明しており、「あらかじめ、こういうふうなことでっていう」を後ろから補足する節の最初に「まあ」が立っている。

例 5-10 (JF4 は以前学校で出会った女性のことについて話している。)

JF4 あそう、私はね、そうそう、あれがあった。あの、うちのー、

JS4 うん。

JF4 その、まあ学校のー、30 歳ぐらいの女の人がいるんだけど。大人の人  
ね。[大人] のほう。

JS4 [うん。]

JS4 あ、うんうん。

JF4 バツイチのほうね。

(学生同士の会話)

例 5-10 の「まあ」の韻律を図 11 で示す。

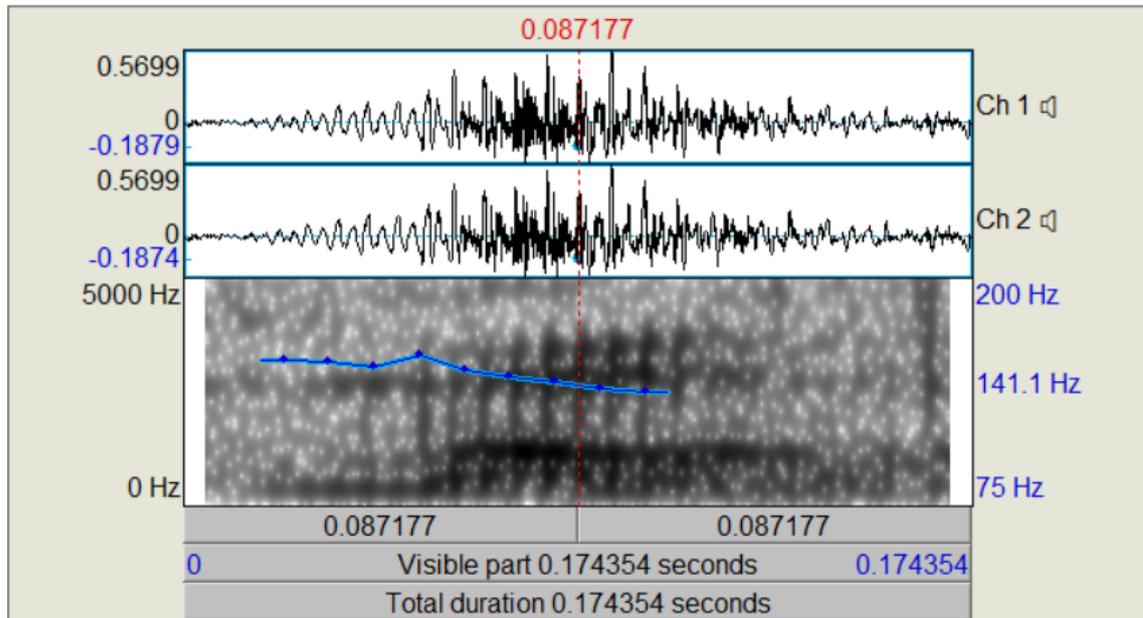


図 11. 例 5-10 の「まあ」の韻律

例 5-10 の「まあ」のピッチが最初から下がり、長さも約 170ms で、発音の特徴は例 5-7 の「まあ」と似ている。例 5-8 では、JF4 は以前学校で出会った女性について話している。過去の体験を語る際に「まあ」を使う用例である。「その、**まあ**学校の一」の部分はこの後との関係が曖昧で、主節か従属節かという判断が難しい。

例 5-11 (JS1 は院生セミナーの日 JT1 は出席できるかを聞いている。)

JT1 ええ。で、その日はおそらく一日中普通は、[成績] 処理をしているんですね。

JS1 [はい。]

JS1 ああー。

JT1 学生達が本国に帰るまでに成績表を出してやらなくてはいけない

[のでー]。だから、おそらく仕事をしているのではな

JS1 [はい。]

JT1 いかと思うんですけど、**まあ**空き時間があったら、あのうちよくちよくのぞかせていただきます。

JS1 はい。おねがいします。

例 5-11 の「まあ」の韻律を図 12 で示す。

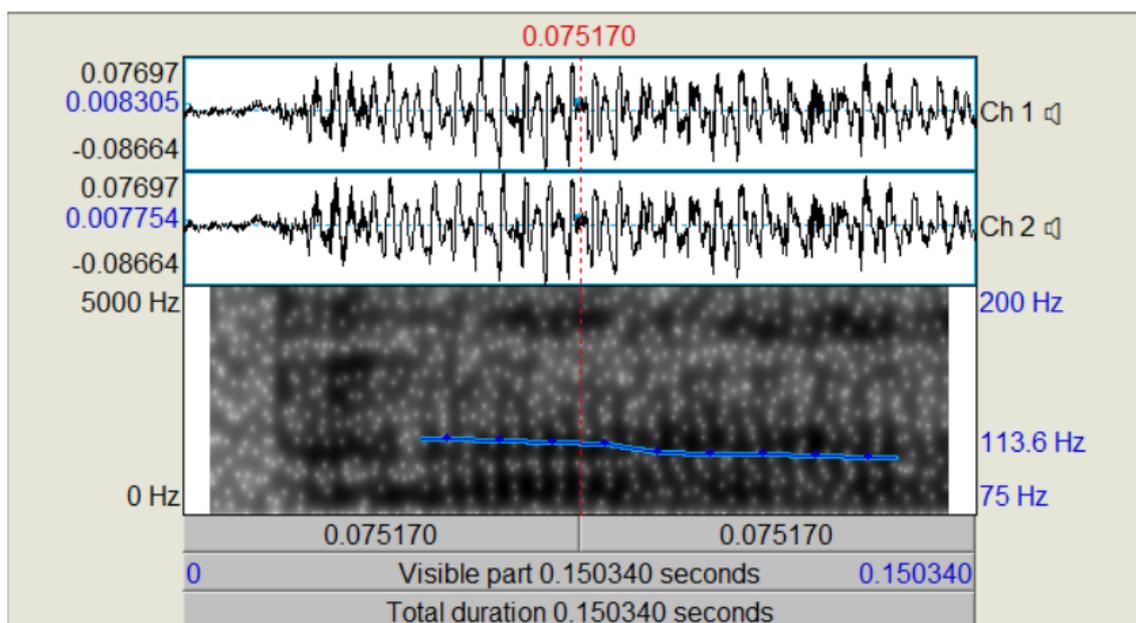


図 12. 例 5-11 の「まあ」の韻律

図 12 を見ると，例 5-11 の「まあ」のピッチは一方的に下がっており，時間は約 150ms である。例 5-11 の「まあ」は「思う」の後にあり，教師が発している。院生セミナーの日に出席できるかについて，JT1 は「まあ空き時間があったら，あのうちよくちよくのぞかせていただきます。」と述べており，観点を変えた発言の従属節に「まあ」が立っている。

例 5-12 (JT6 と JS6 は海外留学について話している。)

JS6 なかなか日本にいて中国人と，中国語で会話する機会って。

JT6 だから知識でこう [あの] う習って知っても，

JS6 [はい。]

JS6 はい。

JT6 なかなか [また会話となると] 違うんですよ。

JS6 [機会がないから。]

JS6 あー。

JT6 で、ぱっと初めて中国に行っても、

JS6 はい。

JT6 緊張もするし。

JS6 はい。

JT6 なかなかこうでないってことが多いんですけどね。まあそういう授業やっていると、そういうのは、なくなりますよね。

(教師と学生の会話)

例 5-12 の「まあ」の韻律を図 13 で示す。

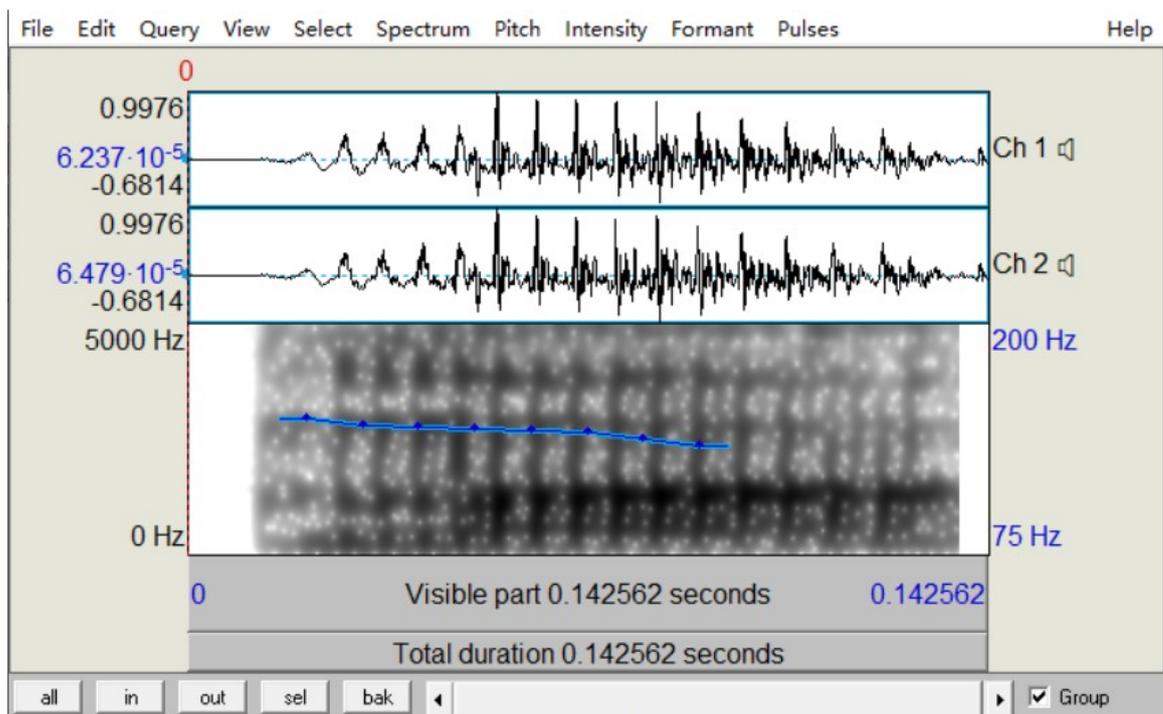


図 13. 例 5-12 の「まあ」の韻律

例 5-12 の「まあ」の発音時間は約 140ms であり、ピッチ曲線を見ると、「まあ」は最初から下がる一方である。例 5-12 では、「まあ」を含む文は次である。「こうでないってことが多いんですけどね。まあそういう授業やっていると、そういうのは、なくなりますよね。」つまり、「まあ」が出現しているのは、教師が自分の体験を踏まえた視点からのコメントであり、その文の中の条件を示す従属

---

節の頭である。

以上、延伸を伴う「まあ」、と延伸しない「ま」を見てきたが、延伸しない場合ピッチと発音の長さ、及び導く節において異なる特徴を持つものが存在しているため、さらに分類し「ま」と「まあ」を分けた。「ま」の時間は約 100ms でピッチが平板型で、従属節に出現しやすいことに対し、「まあ」は約 150ms の下降型で従属節と主節の両方に出現している。また、「まあ」の発音時間は「まあ」と「ま」の中間に位置するが、母語話者は「まあ」を「ま」と同じく 1 モーラと聞くことが多いようである。

以上のことを考え、本研究が収集した「マア」を出現特徴と発音の対応から三つに分類できる。本研究ではそれぞれの「マア」を太字で示す形で表記する（前文で出した自然会話の用例は、この表記を用いて文字化したものである）。

- ・ 延伸を伴う「**まあ**」

本研究で収集した延伸を伴う 256 例の「まあ」は、ピッチはやや平板となつてから下降となり、発音時間は 200ms 以上となっている。（最も長いものは 441ms に達している。）なお、発音の長さは個人差があるが、発音パターンが同じであるため、さらに分類する必要がないと考えられる。

- ・ 延伸せずピッチが下がる「**まあ**」（255 例で、発音時間は 150ms 前後）
- ・ 延伸せずピッチが下がらない「**ま**」（92 例で、発音時間は 100ms 前後）

本節の検討中で、三つの「マア」の使い分けの可能性が見えてきたので、次節ではこの三つの「マア」の使い分けを具体的に考察していきたい。

## 5.2 「マア」の音声的特徴による使い分け

前節では Praat を使って「マア」の音声的特徴を検討し、三つに区別できることを述べた。本節では、それぞれの「マア」が出現する場所に違いがあり、使い分けの認められることを述べたい。それぞれの用例を検討する中で、次のような使い分けがあると考えられる。なお、三つの中で対立関係にあるのは「まあ」と「ま」であるため、「まあ」「ま」「まあ」の順に並べる。

「まあ」

- ・会話の流れの中で重要性の高い箇所の最初に現れることが多い。複文の場合、主節に現れる。
- ・あいづちに使われる。

「ま」

- ・背景情報を提示する部分に現れることが多い。複文の場合、従属節に現れる。
- ・あいづちに使われない。

「まあ」

- ・「まあ」が出現する場所、「ま」が出現する場所の両方に現れる。
- ・あいづちには現れない。

「まあ」と「ま」が相補的な関係で対立している一方、対立が意識されない場所に「まあ」の現れていることが分かる。確認のため、自然会話の「マア」について三つの「マア」と出現場所の関係を確認してみたい。

表6 三つの「マア」と出現場所の関係（学生と教師の会話）

	学生			教師		
	ま	まあ	まあ	ま	まあ	まあ
逆接	7	4	3	4	16	39
順接	0	0	0	0	7	12
挿入	2	0	0	4	3	5
思う	1	0	0	0	2	3
例示	0	0	0	0	2	4
あいづち	0	0	0	0	0	1
笑い	1	0	0	0	4	9
その他	3	5	8	7	16	38
出現総数	13	9	11	11	47	105

表7 三つの「マア」と出現場所の関係（学生同士の会話）

	学生			友人		
	ま	まあ	まあ	ま	まあ	まあ
逆接	3	2	3	3	7	5
順接	1	2	2	1	1	0
挿入	1	0	0	2	1	1
思う	1	0	2	0	1	1
例示	0	0	0	0	0	0
あいづち	0	0	5	0	0	4
笑い	1	0	2	0	2	2
その他	1	6	7	3	2	4
出現総数	7	10	18	6	11	15

総数が少ないため傾向が分かり難いが、「マア」の出現数が多い教師の結果を見ると予想通りの結果になっていることを確認できる。表6の教師の項目を見られたい。逆接では「まあ」39、「ま」4、順接では「まあ」12、「ま」0となり、どちらも「ま」より「まあ」が多い。会話において接続関係を明示するのは論理性を強調したい場所であり、話者が重要と考える場所だと考えられる。そこに「まあ」が多いことは、先ほどの予想を支持する材料となるだろう。一方、挿入は「まあ」5、「ま」4になっている。両者に差がないように見えるが、教師の発した「まあ」と「ま」の総数が105と11であることを踏まえると、挿入では「ま」が積極的に選択されていることが分かる。以下の節では、それぞれの形式ごとに新たな用例を確認していきたい。

### 5.2.1 延伸を伴う「まあ」

延伸を伴う「まあ」が導く内容とその文法形式の特徴を検討してみたい。延伸を伴う「まあ」の特徴は2つにまとめられる。

(A) 中心的主張や判断を述べる場所に現れることが多い。

---

ここでは、次の二つを中心的主張という言葉でまとめた。①会話の流れの中で重要性が高い発言。②複文の主節。そして、先行研究で提案された「曖昧性」や「わだかまり」を表す「マア」は、ほとんど延伸を伴う「まあ」である。具体的な用例から見ていきたい。

例 5-13 (JS3 と JF3 は成績の悪い知り合いのことについて話している)

JF3 え、その人は大学に行きたい人<sup>1</sup>

JS3 うーん。もうあきらめて帰るんじゃない。

JF3 あ、そうなんだ。

JS3 推薦書がかけないでしょ。

JF3 あー。

JS3 成績、えでも一般受験でも学校の、成績証明とか出るでしょう。

JF3 出る、出る。

JS3 いまいちなんじゃないかなあ。

JF3 あ、そう。

JS3 うん。

JF3 まあなんとかいくもんだよね。あのうほら推薦書ってこういろんな書き方が (hh) あるじゃん。

JS3 (hh) プラスの面をね、押して押して。

(学生同士の会話)

例 5-13 では、JS3 と JF3 の知り合いは成績が悪くて、推薦書を書けなく進学が難しい状態である。一般受験の可能性について、JS3 は「成績、えでも一般受験でも学校の、成績証明とか出るでしょう。いまいちなんじゃないかなあ。」と述べている。今までの話の流れを考えると、その知人は進学することが難しいが、JF3 は「まあなんとかいくもんだよね」という異なる意見を出している。ここでの「なんとかいくもんだよね」は JF3 の中心的主張であり、この判断の頭に「まあ」が出現している。そして、判断の根拠として「あのうほら推薦書ってこういろんな書き方が (hh) あるじゃん。」という新しい材料が示されている。

---

例 5-14 (JS7 と JF7 は将来の仕事の展開について話している。)

JF7 えへでもとりあえず，アジアを制覇したくて。

JS7 おう，じゃあ今度インド行こうか。

JF7 んへいや。東アジア。

JS7 東アジア (hh)。

JF7 ちっちゃいから，俺の視野。

JS7 (hh) ほんとちっちゃい。

JF7 東アジア，制覇したくて。

JS7 でもさ，△△の将来やりたいことって，ウエディングプランナーでしょ。

JF7 うん。

JS7 ブライダルへ

JF7 ブライダル。

JS7 △△の担当っていうのは。

JF7 ブライダル，コーディネート [とか。]

JS7 [あコー] ディネーター。

JF7 ブライダルプロデューサーとか，うん。

JS7 あーあ，で，アジアのほうに展開したいんだっけ。ゆくゆくは。

JF7 まあゆくゆくは世界だけどね。

(学生同士の会話)

例 5-14 では，二人が JF7 の将来の仕事について話しており，JF7 にとっては自分語りである。JS7 は「△△の将来やりたいことって，ウエディングプランナーでしょ。」と述べ，JF7 のやりたい仕事を確認している。その後，JS7 の「アジアのほうに展開したいんだっけ。ゆくゆくは」の発話に対し，JF7 が「(アジアだけではなく) ゆくゆくは世界だけどね」という野心を語っており，「まあ」はその最初に出現している。

また，先行研究の説明の中で挙げた「わだかまり」や「曖昧性」の「マア」は，ほとんど延伸を伴う「まあ」の形で出現する。次の例 5-15 と例 5-16 は，「曖昧性」や「わだかまり」を比較的感じさせる「まあ」の例である。

---

例 5-15 (JT6 と JS6 は言語学習について話している)

JS6 だいたい1年から4年間の間に、その一留学経験をしないで卒業した、

JT6 うんー。

JS6 人とかって、だいたいどの程度しゃべれるようになるんですか。

JT6 まあ個人差ありますよ。

JS6 ありますか。

JT6 結局その授業以外でどれだけやったか [によりますよね。でも留学] しなくてもかなりのレベルになる人もいますよ。

JS6 [はー、そうですね。]  
(教師と学生の会話)

例 5-15 では、「だいたい1年から4年間の間に、その一留学経験をしないで卒業した、人とかって、だいたいどの程度しゃべれるようになるんですか。」という質問に対し、JT6 は「まあ個人差ありますよ」で答えている。ここでの「まあ個人差ありますよ」という発話には、ぼかした印象があり、「曖昧性」や「わだかまり」が比較的強く感じられる。その後、JT6 は具体的にどういうふうに個人差が生じるかについて補足しており、それを一言でまとめた「個人差ありますよ」が JT6 の発話の中心的主張と考えられる。この主張の前に「まあ」が出現している。

例 5-16 (JT8 と JS8 は日本語教師になるための海外教育経験について話している。)

JT8 で、将来日本語の先生に。当時はまだ大学院、自分の卒業した大学で、大学院生だったんですけど。

JS8 はいはい。

JT8 日本語の先生になるには、2年間海外で日本語教えたほうが採用されやすいつて言われてたんです。

JS8 それなんか研修がやっぱ、重要なんですか。

---

JT8 重要なんです。

JS8 ああー， そうなんですか (hh)。

JT8 2年間教えればいい先生になるとも， 限らないと思うんですけど。

JS8 (hh) そう， そうですね (hh)。

JT8 20年も教えたからいいとも限らないですし。

JS8 まあそうですね。

JT8 10日でもいい人はいいし。

JT8 私よりも若くていい人もいるからあれなんですけど。いちおう 2年間  
行ってくると，

JS8 ああ， はい。

JT8 なんていうのかな。いちおうまあ， 経験ある。書類上は。

JS8 経験ありますよね。

JT8 経験ある。

(教師と学生の会話)

例 5-16 では，二つの「まあ」が出現している。日本語教師になるため海外の実績が必要という話題になった際，JT8 は「2年間教えればいい先生になるとも，限らないと思うんですけど。20年も教えたからいいとも限らないですし。」と述べて，それに対しJS8 は「まあそうですね。」で賛同している。学生は教師に対して「まあそうですね」と言いにくい，その前の発話に笑いが伴っているため，リラックスした気分になっており，この発言が出たと考えられる。また，二番目の「まあ」の前の「いちおう」が暫定的であることを示しており，「わだかまり」や「曖昧性」の含みを感じさせる。ここでの「いちおうまあ，経験ある」はJT8の中心的主張であり，この発言の後でJS8とJT8が「経験」を繰り返すことから，会話の中でのこの発言の重要性が分かる。「まあ」が導いているのは主に発話の中心的主張もしくは話し手の中心的判断と考えられる。ここまで発言内容から延伸を伴う「まあ」を見てきたが，文法形式においても延伸を伴う「まあ」には，出現場所に特徴がある。それは，単文あるいは，複文の主節に現れやすいことである。これは中心的主張と連動する現象と言えるだろう。

---

例 5-13～例 5-15 は中心的主張を述べる単文に「まあ」が付いている。延伸を伴う「まあ」はこのように単文に付く場合が多いが、例 5-16 の JT8 の発言は、相手の言葉をはさんで、「いちおう 2 年間行ってくると、(中略) いちおうまあ経験ある」という複文になっており、後ろの主節に「まあ」が現れている。

**(B) あいづちとして使える。**

例 5-17 は「マア」があいづちとして使用される例である。

例 5-17 (JS6 と JF6 は店でのアルバイトについて話している)

JS6 スタバなんて、ぜんぜん楽ですよ。

JF6 ほんと。

JS6 何がいったってよし牛とかコンビニと違って、ほんとに厄介なお客さんが来ない。

JF6 まあね。

(学生同士の会話)

例 5-17 では、JS6 の発話に対し、JF6 は「まあね」であいづちを打っている。あいづちの「まあ」は自分の優位性を伝えるもので、ここでは「さっきの発言は自分には分かっていた」という情動的優位性を感じさせる。そして、使用形態から見ると「まあね」、「まあな」の形が多いが、例 5-18 のように「まあ」単独の発話も可能である。

例 5-18 (JT6 と JS6 は学生の敬語について話している)

JS6 例えば、その 8 年ではあれかもしれないですけど、その最近の子は、常識がないとか、敬語も使えないとか、[そういうふう]に言われたりするじゃないですか。そういうことはなんか感じますか？

JT6 [うーんー。]

JT6 んー、いやそんなこと [ないとおもいます。]

JS6 [そんなことないで] すか。

---

JT6 まあやっぱそれは個人差ですよ。

JS6 あーそうですね。

JT6 だから全体としてどうってことではないような気がしますね。

JS6 あーなるほど。

JT6 それはあのうけい，敬語きちんと使えてっ[ていう人]もいれば，そうでない人もいますけれども。

JS6 [そうですね。]

JS6 うーんー。

JT6 まあ。

(学生と教師の会話)

例 5-18 では，二つの「まあ」が出現している。最初の「まあやっぱそれは個人差ですよ」は学生の敬語の使用実態について，JT6 の中心的な判断である。二番目の「まあ」は単独であいづちとして使用される。

あいづちとして発せられた「まあね」「まあな」もしくは単独の「まあ」は，学生同士，もしくは教師から学生への発言に現れる一方，教師に対する学生の中に，このような「まあ」は見られなかった。

### 5.2.2 ピッチが下がらない「ま」

本節ではピッチが下がらない「ま」を検討してみたい。内容と形式の面において、「ま」は「まあ」と対照的な傾向を持つ。まず内容面の傾向から見ていきたい。

(A) 背景情報を提示する部分に現れることが多い。

例 5-19 (JS4 は将来の仕事について話している。)

JS4 あの国語の先生って，

JT4 はい。

JS4 文学志向だと思いますけど，

JT4 はいはいはい。

---

JT4 えー。

JS4 まいろんな視野をもった、

JT4 ふうんー

JS4 国語の先生になれたらなって、思います。

(教師と学生の会話)

例 5-19 では、JS4 は将来の仕事について話している。「国語の先生」を修飾する従属節（「いろんな視野をもった」）を「ま」が導いている。

例 5-20（教師はライティングセンターについて説明している。）

中央図書館の一階，入ってあの左，すぐ左に，突き当たりにあります。ライティングセンターここですね。でここであの一，まこんな机であの一対一の，お一相談，個人相談を受けてます。

(文系講義 C)

「ま」を含む「でここであの一，まこんな机であの一対一の，お一相談，個人相談を受けてます」の文構造は分かり難いが、「ここで一対一の個人相談を受けてます」に「こんな机で」が挿入されていると考えるべきだろう。つまり、「ま」は挿入句の頭に置かれていることになる。ここに挿入されるのは個人相談を受けるライティングセンターについての背景情報である。

例 5-21（教師は地方に行くと、いろいろな方言が聞こえ、研究の手掛かりになることについて話している。）

で、そうしたところが、まこういうものが、ずっと聞いていけば手に入るわけですね、で面白いのは結局ここから何を読み取るかというのが面白いわけです。

(文系講義 D)

例 5-21 も文構造が分かり難いが、「で面白いのは結局ここから何を読み取るかというのが面白いわけです」という後半部分が中心的主張になり、従属的部

---

分の頭に「ま」が置かれていることが分かる。

例 5-19～例 5-21 の「ま」は、どれも話者の中心的主張ではなく、修飾、挿入、従属的部分など、主張の前提もしくは主張を補足する部分に現れている。従属節に現れる「ま」の用例をもう 1 つあげてみたい。

例 5-22(教師は外国人が日本語を学ぶ時に気になる規則について話している。)

僕らはあんまり普段考えたことないんですけど、でも外国、人、日本語学ぶ外国人としてはやっぱこういう、どういう規則があるんだろうということが気になるわけです。で、**ま**あの今、これ答え出さないの、えーいろいろ考えてみてください。

(文系講義 D)

「ま」が導く「今、これ答え出さないの」は、続く節（「いろいろ考えてみてください」）の前提となる内容を述べる従属節である。例 5-22 の「ま」も背景情報を述べる際に出現している。

例 5-23 (教師は自分が大学を受けた時の体験を述べている。)

今思い返してみると、その一僕が大学を受ける時、の、**ま**、キーワードっていうのが、**ま**先生にはちょっとなりたかった、ですね。

(大学講義 D)

例 5-24 (JT3 と JS3 は JS3 の論文のテーマについて話している。)

JT3 あのう論文書こうと思ってる、テーマ。

JS3 は、音声、で。

JT3 あ、音声です [かあ。へえー。]

JS3 [はい、あのう向こう] で、ベトナムで、あのう、テープ、[に。]

JT3 [うん。] いろいろ。

JS3 はい、とってき [たんで。]

JT3 [とってき] て。

---

JS3 ま、それを、分 [析しようかなと。起こすの大変そうなんですけど。]

JT3 [起こして、いろいろやろうと、ふーんーーーー]  
ー。なるほど。

(教師と学生の会話)

例 5-23 では、教師は自分が大学を受けた時の体験を述べる際に「ま」を二回使っている。これは教師が日本語教育の意味を説明する際、自分のことを背景情報として出す例文である。そして例 5-24 は、JS3 は自分の論文のテーマを説明する際に、「ま」を使っている。この「ま」がついているのは会話の中の重要な情報であり、ここまでの検討結果を踏まえると「まあ」が期待される場所に「ま」が立っていることになる。この背景には話者の修辭的配慮を指摘できると考えている。引用した会話は学生が教師に対して自分の研究計画を語っている場面で、学生である JS3 の発言には「あのう」の使用や文の断片化など、遠慮しながら語っていることを感じさせる特徴が見られる。そして、「ま」を含む文も、読点になって文が断片化している。つまり、話者の遠慮する意識が「まあ」を「ま」に変えたと考えられる。

例 5-25 (JS7 は北京について話している。)

JS7 うんー。僕も夏一回、けんしゅ、大学のプログラムの研修で [一ヶ月]  
間北京に、

JT7 [あ、ええ。]

JT7 ああそうですか。

JS7 ま短期留学する機会が [あったん] ですけど。実際いってみて、あの、  
なんていうんですかね。

JT7 [えー。]

JT7 ええ。

JS7 日本だとやっぱり別の国の料理っていうのはちょっと特別なかんじ  
がするじゃないですか。

JT7 たしかに。(hh)。

(教師と学生の会話)

---

例 5-25 では、JT7 と JS7 は北京について述べている。JS7 は以前北京に行っていたことがあるという話をする際、「短期留学する機会があったんですけど」という背景情報を挿入している、この背景情報を挿入する際に「ま」を使っている。

実際の録音を聞くと、「ま」の発音には、短いものが多い。イメージとしては 1 モーラであるが、実際の会話では、発音が 0.05 秒程度しかない「ま」が存在している。これほど短いと、注意しないと聞き漏らしてしまう。このような「ま」は情動的優位性を感じた時に、意図的にその情動的優位性を示しているとは考えにくい。話者が情動的優位性を認知して無意識に発している可能性もあるが、この点については更なる考察が必要と考える。

以上のことを考え、ピッチが下がらない「ま」は背景情報を提示する部分に現れることが多く、複文に出現する場合、従属節に現れやすいと考えられる。

背景情報を提示する部分に現れることが多いという特徴以外に、ピッチが下がらない「ま」の二つ目の特徴として、あいづちとして使えないことを指摘したい。

### (B) あいづちとして使えない

前節では、延伸を伴う「マア」があいづちとして使えると述べた。例 5-26 はあいづちの「マア」である。

例 5-26 (JS6 と JF6 はアルバイトについて話している。)

JS6 スタバなんて、ぜんぜん楽ですよ。

JF6 ほんと。

JS6 何がいいってよし牛とかコンビニと違って、ほんとに厄介なお客さんが来ない。

JF6 まあね。

(学生同士の会話)

ここでの「まあ」を「ま」に替えると、あいづちには聞こえなくなる。例 5-27 を見られたい。「ま」ではなく「まあ」にすると、許容度が上がるが、多少の違

---

和感が残る。

例 5-27 (JS6 と JF6 はアルバイトについて話している。)

A : 何がいいってよし牛とかコンビニと違って、ほんとに厄介なお客さんが来ない。

B : まあね。

B2 : まあ。

?? B3 : まね。

?? B4 : ま。

? B5 : まあね。

? B6 : まあ。

(例 5-26 より一部改変)

あいづちとしての的確性はこれまでの考察と合致する。「まあね」、「まあ」などのあいづちは、十分に納得していないという含みを強く感じさせる。これは「曖昧性」や「わだかまり」と重なるもので、前述したように、長い「まあ」の方が「曖昧性」や「わだかまり」の表現に相応しい。これが、あいづちの「まあ」が延伸を伴う「まあ」を要求する理由だと考えられる。

### 5.2.3 中間的な「まあ」

本節では延伸せずピッチが下がる「まあ」の出現場所の特徴について考えてみたい。例 5-25 は「まあ」の用例である。

例 5-28 (JT9 は自分の仕事について説明している。)

JT9 あのう留学生センターっていうところ [がある] なんですけど、そこで留学生に日本語を教えてたんです。

JS9 [はい。]

JS9 あーあ。

JT9 はい。

JS9 じゃあ外国人の人むけに。

---

JT9 ええ，ええ。

JS9 えー。

JT9 で，4月からこちらに来て，

JS9 はい。

JT9 で，今は日本人の学生に，

JS9 はい。

JT9 あの日本語教育のこととかを，

JS9 おー。

JT9 まあ教えてて，留学生に日本語を教えるのはもう，ないです。

JS9 あそうですか。

(教師と学生の会話)

例 5-28 では，JT9 は自分の仕事について説明している。「今は日本人の学生に」「あの日本語教育のこととかを」「まあ教えてて」この三つの文は共に従属節で，最後の「留学生に日本語を教えるのはもう，ないです」という主節の背景情報を提示する際に「まあ」が現れている。

「まあ」を内容とのかかわりで見ると，例 5-28 のような前提・背景を示す場合と，次の例 5-29 のような中心的主張に現れる場合の両方があり，明らかな偏りはない。

例 5-29 (JS1 は院生セミナーを主催することになり，それについて二人は話している。)

JT1 そりゃあ△△さんも大変だと思いますよ。うんー。

JS1 はい。

JT1 どんな小さな，会合でもね？

JS1 はい。

JT1 それを主催するのは大変なことなのに。

JS1 はい。

JT1 今回発表者が 50 人でしょ？

JS1 はい。

JT1 で、来る方のことも考えて、[手配]するっていうのは大変なことだと思っ  
うから。

JS1 [はい。]

JS1 はい

JT1 ねえ、頑張っ  
てね。ま  
ああのき  
つと成功  
しますよ。

(教師と学生の会話)

前文であいづちとしての使用可能性を考察した時、「まあ」は「まあ」と「ま」  
の中間に位置すると述べた。あいづちは視点の優位性と深く関わるもので、あ  
いづちの許容度において、「まあ」が「まあ」と「ま」の間に来るとすれば、「ま  
あ」は優位性との関わりも両者の中間にある可能性がある。

大学講義及び自然会話における三つの「マア」の出現数は以下の通りであ  
る。

表 8. 教師と学生の「マア」の出現数

	ま	まあ	まあ
教師	11	47	105
学生	13	9	11

表 9. 学生同士の「マア」の出現数

	ま	まあ	まあ
学生	7	10	18
学生	6	11	15

表 10. 大学講義の「マア」の出現数

	ま	まあ	まあ
出現数	55	278	105

---

これらの表を見ると、三つの「マア」の出現数の違いが分かる。特徴的なのは、表 8 の教師と学生の会話である。教師は「まあ」を多用する一方で「ま」をあまり使用していないが、学生は「マア」全体の使用を抑えた上で、「まあ」の使用を避けている。そして、表 9 と表 10 において「ま」の使用が他の形式よりも少ないことを加味すれば、表 8 の学生が教師に対して「ま」を選択する傾向があると考えられる。また、大学講義では、「まあ」が多用されている。「まあ」は視点の優位性を強くだして尊大な印象を与える危険がある一方で、「ま」は過度な遠慮を感じさせてしまう可能性がある。この二つの印象を避けるために、講義の中で教師は「まあ」を多用するのではないだろうか。

### 5.3 本章のまとめ

ここまでの考察をまとめてみたい。自然会話における延伸を伴う「まあ」と延伸しない「マア」を調査し、延伸しない場合ピッチと発音の長さ、及び出現傾向において異なる特徴を持つものが存在していることを確認した。これに基づき「マア」を三つに分けた。それぞれの特徴は以下の通りである。

- ・「まあ」：発音時間が長く（約 200ms 以上で、長くて 400ms を超えるものも存在している）、やや平板になってから伸びながら下がる。会話における中心的主張や複文の主節を導くことが多い。
- ・「ま」：発音時間は約 100ms で平板型となる。発話の背景・前提の前に現れることが多く、複文では従属節に出現しやすい。
- ・「まあ」：発音時間は約 150ms で下降型となる。出現する場所は「まあ」と「ま」の両方に重なる。

---

## 補説

今回収集した自然会話と講義の中に、ピッチが上がって、延伸を伴う「マア」は一例も存在しなかったが、ピッチが上がって、延伸を伴う「マア」が存在することを大工原（2010）が主張している。このような「マア」と本研究における延伸を伴う「まあ」の共通点について、優位性の観点から考察したい。本論では触れていない考察になるので、補説として最後に加えておきたい。

今まで延伸を伴う「まあ」を音声、内容、そして形式面から考察を行った。延伸を伴う「まあ」の特徴を以下の3つにまとめる。

- ・発音は延伸が伴い、比較的長い。
- ・中心的主張や判断を述べる場所に現れることが多い。
- ・あいづちとして使える。

この3つのうち、優位性との関わりが最も分かりやすいのは「あいづちとして使える」ことである。第4章で述べたように、あいづちとしての「まあ」は視点の優位性からの発話で、「(自分は)既に分かっている」などの印象を与え、相手の発話の価値を下げる。にもかかわらず、あえてあいづちの「まあ」を発するのはこの優位性をあからさまにやってみせるためではないか。無意識に発するのではなく意図的に視点の優位性を示すため、学生が教師に対して使えないのも自然だろう。

次は「中心的主張や判断を述べる場所に現れることが多い」ことについて考える。「マア」は視点の優位性が出現条件にあり、特に視点の優位性と情動的優位性は話し手の自信と強く関わっている。話し手は自分の中心的主張や判断を述べる際、聞き手が自分の主張を受け入れることが重要である。発話する時、自信がなさそうに見えると、発話内容の信憑性も低くなるだろう。前述したように、あいづちの「まあ」は視点の優位性を意識的に示す可能である。これは、あいづち以外の「まあ」にも共通していると考えられる。

例補-1（JS9 と JF9 は飲み会のことについて話している。）

---

JS9 あ、そういえば△△にあれ聞いといたよ。

JF9 何が。

JS9 飲み会のやつ。

JF9 あ、なんていっていった？

JS9 え、出るって。

JF9 あ、じゃああとで追加しとくわ。

JS9 うん。

JF9 そうな、予約しとかな、すっかり忘れとった。

JS9 いつだっけ？

JF9 え、15。そろそろやばいか。

JS9 うん。

JF9 まあ大丈夫やろ、あそこ。

(学生同士の会話)

例補-1 では、飲み会の店は予約していないことに対し、JF9 は「そろそろやばいか。」と述べた後、「まあ大丈夫やろ、あそこ。」と発話している。これは、「あの店のことはよく知っていて、早めに予約をとらなくても大丈夫だと分かる」という情動的優位性を背景とした発言であると考えられる。「まあ」をつけることで、意識的にこの情動的優位性を JS9 に示し、相手に安心させる。あいづち以外の「まあ」も、意図的に優位性を示すものだと考えられる。

最後は「発音は延伸が伴い、比較的長い」ことについて考えてみたい。前文では、延伸を伴う「まあ」は意識的に視点の優位性を示す可能性があるとして述べたが、それ以外にも、同じく延伸が伴い、長い発音をしているが、発音の特徴が異なる「マア」が存在している。今回収集したデータには出現していないが、それらの「マア」も「まあ」と同じく優位性を意識的に示すものだと考えられる。まず、大工原(2010)では、「マア」は強調的用法があると指摘し、その発音パターンは低高のパターンになると述べている。図 14 の右側は強調的用法の「マア」の韻律である。(以下、大工原の表記にしたがい、強調的用法の「マア」を「まー」で表記する。)

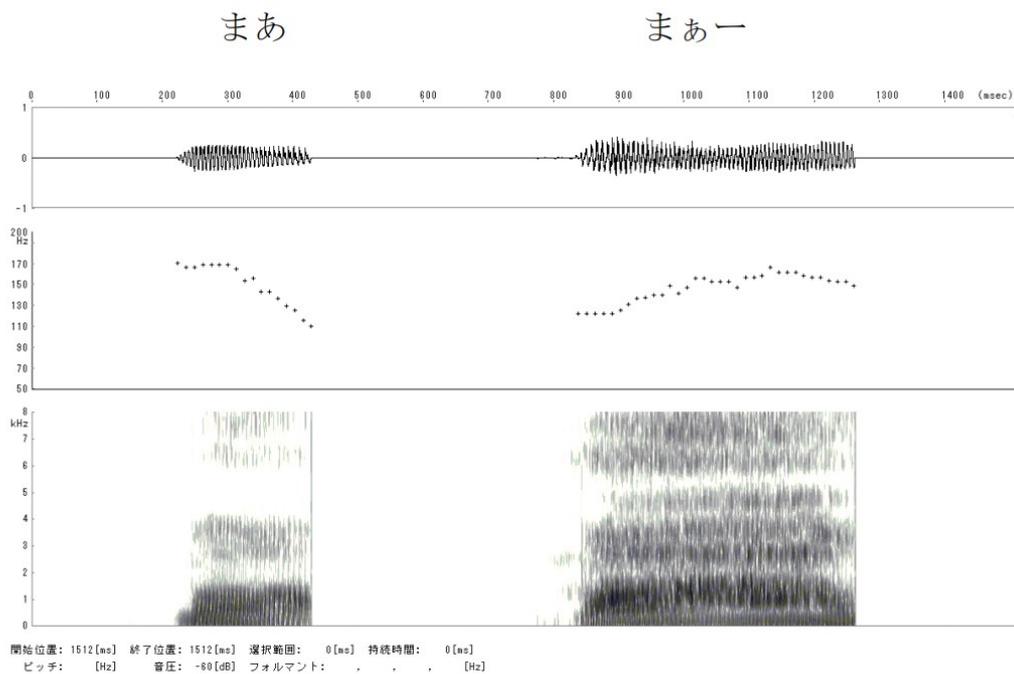


図 14. 但し書き的用法と強調的用法の韻律

(大工原 2010 : 156 より)

強調的用法の「まあー」は、例補-2 のようなものである。

例補-2 日本でリンゴといたら、**まあー**青森ですよ。

(大工原 2010 : 128)

例補-2 の「まあー」は「わだかまり」に関する含意はなく、「ともかく青森だ」という強い主張に解釈されると大工原は述べている。この「ともかく青森だ」という強い自信は、青森のリンゴについて十分な情報を持っているという自信から生まれるもので、情動的優位性を背景としている。ここでの「まあー」はこの優位性を強調する用法であると考えられる。

また、同じく今回収集したデータに出現していなく異なる発音パターンで延伸を伴う「マア」が存在している。それは「まあ」の最初にわずかに上がる部分を伸ばして発音するものである。(以下、このような「マア」を「ま<sup>ノ</sup>あ」と表記する。) 図 15 は日本語母語話者が発音した「ま<sup>ノ</sup>あ」を *praat* で音響分析したものである。

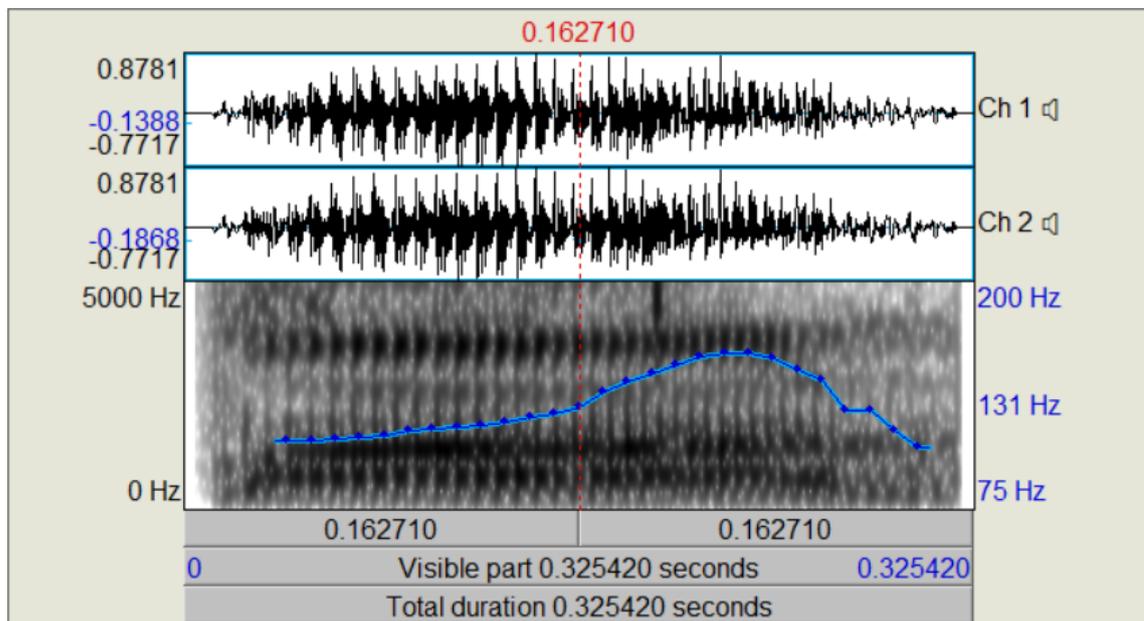


図 15. 「まゝあ」の韻律

図 15 で分かるように、「まゝあ」の最初に上がる部分は「まあ」より著しく、上がる部分の発音も延伸が伴っている。ピッチは上がった後、一気に下がっている。ピッチの上がる部分を強調する「まゝあ」の用法も特殊なものである。それは「まゝあね」という特定の形に出現し、自らの功を自慢する場合である。

例補-3 A：英語 100 点とったの？ すごいなお前。

B1：まゝあね。

B2：?? まゝあ。

(作例)

例補-3 では、A の発話に対し、B1 の「まゝあね。」は発話可能であるが、「まゝあ」のみの発話はかなり不自然である。次のような発話にも、「まゝあ」は使えない。

例補-4 ??それじゃ、まゝあ説明しよう。

(例 2-20 より一部改変)

---

例補-5 ??ま<sup>ア</sup>あ, そんなに興奮しないで。

(例 3-9 より一部改変)

例補-6 ??日本でリンゴといったら, ま<sup>ア</sup>あ青森ですよ。

(例 5-10 より一部改変)

つまり、「ま<sup>ア</sup>あ」は「ま<sup>ア</sup>あね」という形で自慢に特化する特殊な「マア」だと考えられる。自分自身を客観視し、自分が置かれている状況は自分にとって大したことではないという自慢が優位性につながっている。つまり、自らの功を自慢することは、優位性を示すことと一致すると考えられる。

以上、ピッチがやや平板となってから下降する「まあ」、低高の 패턴の「ま<sup>ア</sup>あー」、上がる部分に延伸が伴う「ま<sup>ア</sup>あ」、延伸を伴うこの3つの「マア」の発音パターンを考察した。発音パターンは異なるが、発音を伸ばして、優位性をあからさまにやってみせることが共通している。「マア」の発音を伸ばすことによって優位性を強調すると考えられる。そして異なる発音パターンによって、意味（自慢、強調、自信など）を分けているのではないか。

---

## 第 6 章 結論

---

## 6.1 本研究のまとめ

本研究では、先行研究で考察されていない「マア」の出現条件と音声的特徴をめぐって、以下の二つを研究課題として立てた。

研究課題 (1) 「マア」の出現条件を明らかにする。

研究課題 (2) 「マア」の音声変化（発音時間，ピッチ）の使用実態及び出現条件との関係を明らかにする。

### 研究課題 (1)

ここでは「マア」の出現条件についての仮説を提示し、自然会話の用例を検討することにより仮説の有効性を検証するという手順を取った。まず、「マア」と社会的立場との関係、発話の視点との関係、情報の独占との関係から、「マア」は話し手が立場的優位性、視点の優位性、情報的優位性のいずれかを感じる場所に出現する。」という仮説を立てた。

自然会話のデータ収集においては、「マア」の使用が社会的立場に影響されると予想されるため、「教師と学生の会話」と「学生同士の会話」の両方からデータを収集した。これに加えて大学講義という条件の異なる発話も分析データとして使用した。自然会話のデータの中で、「マア」の出現しやすい形式（文法形式などから客観的に規定できる形式）を探し、逆接形式との共起、順接との共起、挿入との共起、「思う」「考える」との共起、例示との共起、あいづちとしての使用、笑いとの共起の7つを抽出した。仮説の検証はこの7つのグループに沿って進め、次の二段階の手順を踏んで有効性を検証した。①各グループから複数の用例を抽出し、すべての「マア」が優位性とかかわる場所に現れていることを確認した。なお、「その他」（7グループ以外）に分類される用例数が多いため、「その他」の用例についても検討を行った。②7グループの中で突出して用例数の多い逆接を中心に、それらの場所が話者に優位性を感じさせる必然性を持つことを述べて、仮説の有効性を検証した。

### 研究課題 (2)

---

Praat を使って「マア」の音声を考察し、自然会話に現れた「マア」は音声的特徴及び出現傾向から三つに分けられる。延伸を伴う「まあ」は中心的主張に先行することが多いのに対し、ピッチが下がらない「ま」は主張の前提になる背景などに先行する傾向がある。優位性を強調したくないという配慮から「ま」が選ばれることも明らかにした。「まあ」は「まあ」と「ま」の中間にあり、「まあ」と同じ使い方、「ま」と同じ使い方の用例がほぼ同数見られた。音声的特徴と優位性表現の両方において、「まあ」は「まあ」と「ま」の中間にある。

## 6.2 日本語教育への示唆

「マア」は優位性に関わっており、尊大な印象を与えやすい危険なフィラーである。しかし、日本語の教科書では「マア」についての言及が少ない。

表 1 1 . 日本語教科書における「マア」

教科書	「マア」についての記述
初級日本語 [げんき] I II	「まあまあ」のみを言及
新日本語の基礎 I II	言及なし
みんなの日本語初級 I II, 中級 I	言及なし
できる日本語初級, 初中級	言及なし
新文化初級日本語 I II	言及なし
新装版日本語初級 I II	感動詞の「マア」のみを言及
テーマ別中級から学ぶ日本語三訂版	言及なし
総合日語 一, 二, 三, 四	言及なし
新版中日交流標準日本語 初級上, 下	「表示不十分理想, 但还是能过得去的程度, 用于调控自己或对方的不满情绪。」  (十分ではないが, 一応はがまんできる程度であるさま。自分や相手の不満を調整するために使う。)

筆者が確認したところ、「マア」について説明している教科書は少ない。『初級日本語 [げんき]』は「まあまあ」のみに言及し、『新装版日本語初級』は感動詞の「マア」のみに言及している。比較的詳しく説明している『新版中日交流標準日本語』は「マア」について「(筆者訳) 十分ではないが, 一応はがまんできる程度であるさま。自分や相手の不満を調整するために使う。」と記述している。この記述は「マア」の一部の用法であり、「マア」の実態を把握することが難しいと考えられる。また、「マア」にとって立場的優位性が重要であるが、辞書にもこの特徴が書かれていないため、学習者には「マア」を「大体」「おおよそ」の

---

意味で使う人があり、失礼な印象を与えてしまう危険がある。「まあ」と「ま」を使い分けることで、母語話者はこの危険を回避する場合があるが、この事実はいまだ指摘されていない。一方、「マア」は話し手の自信のある発話の前に出現しやすい。つまり、「マア」の後にポイントとなる情報が付いてくる可能性が高く、これは日本語学習者の聴解において有益な知識になると考えられる。これらを含め、「マア」に関する様々な知識は日本語会話でのやりとりや意思疎通をより確かなものにできると考えられる。このことを考え、日本語教育現場では、「マア」を含めたフィラーを単に「間を埋める言葉」ではなく、その具体的な出現条件や適切な使い方を学習者に教える必要があると考える。

### 6.3 今後の課題

本研究は「マア」の三つの出現条件を明らかにした。すなわち、立場的優位性、情動的優位性、視点の優位性である。この三つは最終的に一つに統合されるべき関係にあると思われるが、残念ながらその方法を見つけることができていない。三つの優位性がどのような関係にあるかの解明が今後の重要な課題である。また、母語話者が「マア」に直感的に感じる「曖昧性」と「わだかまり」と、出現条件の関係もまだ解明できていない。「マア」には解明すべき課題がまだ多く残されている。

また、今回は音声データだけを収集したが、実際の会話では、「マア」を発する際は「自信」、「余裕」、「自慢」など様々な表情や動作があり、そのような非言語情報は「マア」の使用と深く関わっていると考えられる。今後は録画データを集め、「マア」を発する際の非言語行動を考察していきたい。

日本語は中国語、英語と比べ、数多くのフィラーが存在している。「マア」はその中の比較的出現数の多いものである。初級学習者は「マア」より、母音型のフィラーを選択する傾向がある（小西，2018）ため、今後は自然会話のデータを使い、「マア」以外のフィラーの出現条件や使用実態を明らかにしたい。

---

## 参考文献

- 池田佳子 (2008) 「会話に不可欠な「言い淀み」の機能の一考察」, 『言語文化研究叢書』 7, pp. 1-13.
- 伊佐早敦子 (1953) 「はなしことば-序-不整表現を中心として」, 『国語国文』 22(3), pp.183-201.
- 磯野英治, 上仲淳 (2016) 「日本語学習者がターン交替時に使用するディスコースマーカー：日本語母語話者との比較」, 『日本語研究』, (36), pp.87-95.
- 梅林博人 (1993) 「言いよどみ語と留学生への日本語指導」, 『千葉大学留学生センター』 1, pp.92-96.
- 落合哉人 (2017) 「電子媒体における「フィラー」」, 『筑波日本語研究』22, pp.75-104.
- 葛欣燕, 松村瑞子 (2017) 「指示詞型フィラーの用法についての日中対照分析：日本語「あのー」と中国語「那个 nage」の機能を中心に」, 『言語文化論究』 38, pp.41-58.
- 加藤重広 (2001) 「談話標識の機能について」, 『東京大学言語学論集』 20, pp. 121-138.
- 加藤重広, 安藤智子 (2016) 『基礎から学ぶ音声学講義』, 研究社.
- 金田芙久美 (2008) 「会話中に発生するフィラーについて--自然談話調査と談話別談話調査から」, 『語文』 132, pp. 68-50.
- 川上恭子 (1993) 「談話における「マア」の用法と機能(1): 応答型用法の分類」, 『園田国文』 14, pp.69-78.
- 川上恭子 (1994) 「談話における「マア」の用法と機能(2): 展開型用法の分類」, 『園田国文』 15, pp. 69-79.
- 川田拓也 (2007) 「日本語談話における「マア」の役割と機能について」, 『言語学と日本語教育』 V, pp.175-192.
- 川田拓也 (2010) 「日本語フィラーの音声形式とその特徴について—聞き手とのインタラクションの程度を指標として—」, 京都大学大学院, 博士論文.
- 北原真冬, 田嶋圭一, 田中邦佳 (2017) 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』, ひつじ書房.

- 
- 魏春娥 (2015) 「談話におけるフィラー『ま(一)』の待遇差に関する予備的考察」,  
『東アジア研究』(13) , pp. 75-93.
- 神尾昭雄 (1996) 『情報のなわ張り理論: 言語の機能的分析』, 大修館書店.
- 串田秀也, 平本毅, 林誠 (2017) 『会話分析入門』, 勁草書房.
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」, 『講座日本語の表現[3]話しことばの表現』, 筑  
摩書房.
- 小出慶一 (2007) 「フィラー化の様相--「マア」の場合」, 『埼玉大学紀要』教養  
学部, 43(1) , pp.57-72.
- 小西円 (2018) 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」, 『国立国語  
研究所論集』15, pp. 91-105.
- 古賀恵介 (2006) 「挿入節について」, 『福岡大学人文論叢』38(3) , pp. 819-854.
- 定延利之, 田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構: 心的操作標  
識「ええと」と「あの(一)」」, 『言語研究』108, pp.74-92.
- 定延利之 (2010) 「会話においてフィラーを発するということ」, 『音声研究』14(3),  
pp. 27-39.
- 定延利之 (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』, ひつじ書房.
- 城生佰太郎 (1997) 『実験音声学研究』, 勉誠社.
- 鈴木一彦 (1973) 「感動詞とは何か」, 『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動  
詞』, pp.137-175.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」, 『文化言語学: その提言と建設』,  
pp.96-106.
- 田窪行則, 金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」, 『認知科学』3(3),  
pp.59-74.
- 田窪行則 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 『文法と音声』, pp.257-280.
- 大工原勇人 (2010) 「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究:  
フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」, 神戸大学博士学位論文.
- 富樫純一 (2002) 「談話標識「マア」について」, 『筑波日本語研究』7, pp.15-31.
- 中島悦子 (2009) 「自然談話に現れるフィラー—自然談話録音資料に基づいて」,  
『国士館大学アジア・日本研究センター紀要』4, pp.1-23.
- 中村香代子 (2007) 「日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて:自

- 
- 由記述式談話完成テストの回答分析から」,『語学教育研究論叢』24, pp.149-168.
- 永田良太 (2007) 『接続助詞ケドの発話解釈過程と談話展開機能』, 溪水社.
- 西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」, 『日本語学』12(5), pp.89-96.
- 野村美穂子 (1996) 「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィラー」に注目して—」, 『文教大学教育研究所紀要』5, pp.91-99.
- 松浦和美 (1996) 「日本語の談話における filler に関する研究」, 『中国四国教育学会 教育学研究紀要』42(2), pp.522-527.
- 水上悦雄,山下耕二 (2007) 「対話におけるフィラーの発話権保持機能の検証」, 『認知科学』14(4), pp. 588-603.
- 宮永愛子 (2011) 「日本語のフィラー表現の談話機能—「あの」と「なんか」を中心に—」, 広島大学大学院, 博士論文.
- 丸山岳彦, 高梨克也, 内元清貴 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』に現れた挿入構造の分析」, 言語処理学会第10回年次大会発表論文集, pp.448-451.
- 丸山岳彦 (2014) 「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析」, 『日本語文法』14(1), pp.88-104.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」, 『阪大日本語研究』1, pp. 63-88.
- 柳澤浩哉 (2000) 「近松における修辭的分析の試み—説得力を作り出す技法の解明」, 『表現研究』72, pp. 31-38.
- 山田葵 (2013) 「自然談話における「マア」の使用について: 談話上の機能と話し手の情報処理のプロセス」, 『南山言語科学』8, pp.295-312.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版.
- 劉佳珺 (2012) 「会話における割り込みについての分析: 日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴」, 『異文化コミュニケーション研究』24, pp.1-24.
- Brown, G. (1977). *Listening to spoken English*. London: Longman.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage* (Vol. 4). Cambridge university press.
- Fox Tree, J. E. (2010). Discourse markers across speakers and settings. *Language and*

---

*Linguistics Compass*, 4(5), 269-281.

Fraser, B. (1999). What are discourse markers?. *Journal of pragmatics*, 31(7), 931-952.

Maynard, S. K. (Ed.). (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management* (Vol. 35). Ablex Publishing Corporation.

Maschler, Y., & Schiffrin, D. (2015). *Discourse markers: Language, meaning, and context. The handbook of discourse analysis*, 1, 189-221.

Philips, M. K. (1999). *Discourse markers in Japanese: Connectives, fillers, and interactional particles*. Michigan State University.

R. M. Weaver. (1953). *The Ethics of Rhetoric*. Davis : Hermagoras Press, p137.

贾琦, 赵刚, & 孙莉 (2013) 「日语填充语及其功能」, 『日语学习与研究』(1), pp. 10-18.

赵刚 (2013) 「日语话语标记及其功能和特征」, 『日语学习与研究』(2), pp. 7-12.

## 教科書

初級日本語 [げんき] I 第2版, 2011年, ジャパンタイムズ.

初級日本語 [げんき] II 第2版, 2011年, ジャパンタイムズ.

新日本語の基礎 I 分冊中国語訳, 1990年, スリーエーネットワーク.

新日本語の基礎 II 分冊中国語訳, 1990年, スリーエーネットワーク.

みんなの日本語初級 I, 1998年, スリーエーネットワーク.

みんなの日本語初級 II 第2版, 2013年, スリーエーネットワーク.

みんなの日本語中級 I 第2版, 2008年, スリーエーネットワーク.

新文化初級日本語 I, 2000年, 文化外国語専門学校.

新文化初級日本語 II, 2000年, 文化外国語専門学校.

できる日本語初級, 2011年, アルク.

---

できる日本語初中級, 2012 年, アルク.

新装版日本語初級 I, 2002 年, 東海大学出版会.

新装版日本語初級 II, 2002 年, 東海大学出版会.

テーマ別中級から学ぶ日本語三訂版, 2014 年, 研究社.

総合日语 第一册, 2009 北京大学出版社.

総合日语 第二册修订版, 2010 北京大学出版社.

総合日语 第三册修订版, 2010 北京大学出版社.

総合日语 第四册修订版, 2011 北京大学出版社.

新版中日交流标准日本語初級上第二版, 2013 年, 人民教育出版社.

新版中日交流标准日本語初級下第二版, 2013 年, 人民教育出版社.

---

## アンケート

### アンケートのお願い

私は広島大学大学院で日本語を研究している馮文彦（ひょう・ぶんげん）と申します。このアンケートは会話における「まあ」の使い方を調査するものです。ご協力よろしくお願いいたします。

なお、アンケート結果は研究のみに使用し、回答者の個人情報及び結果を他の目的に使用することはありません。

日本語の会話では「まあ」がよく使われますが、「まあ」が自然な場合と不自然な場合があるようです。①から⑦の「まあ」の使い方は自然でしょうか。それぞれの自然さについて五つの選択肢から一つを選んで○をつけてください。

#### ①（若手社員がリーダーに対して）

まあ，そういう事ですので，ミスのないようにお願いいたします。

1.自然 2.やや自然 3.どちらとも言えない 4.やや不自然 5.不自然

#### ②（上司に対して）それでは，まあ説明します。

1.自然 2.やや自然 3.どちらとも言えない 4.やや不自然 5.不自然

#### ③（次は工務店と顧客の会話です。）

（工務店が顧客に対して）まあ，作業はこのような流れになりますが，よろしいでしょうか。

1.自然 2.やや自然 3.どちらとも言えない 4.やや不自然 5.不自然

（顧客が工務店に対して）まあ，これだけ考えていただければ，私どもも安心できます。

1.自然 2.やや自然 3.どちらとも言えない 4.やや不自然 5.不自然

④（次は A と B の会話です。A の予想を聞いた B が異なる予想を出しています。それぞれの「まあ」を判断してください。）

---

A : 1980 円に消費税だから、まあ、2100 円くらいかな。

B : まあ、2200 円くらいだよ。

A の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

B の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

⑤ (次は A と B の会話の一部で、A の発言に対して B が反論しています。それぞれの「まあ」を判断してください。)

A : まあ、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B : まあ、出世したいからこそ、あえて言うんだ。

A の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

B の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

⑥ (次も A と B の会話の一部で、A の発言に対して、B が反論しています。上の⑤と同じに見えますが B の反論が違っています。それぞれの「まあ」を判断してください。)

A : まあ、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。

B : まあ、出世が全てのお前には分からんよ。

A の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

B の「まあ」は自然ですか？

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

⑦ 自分の話が冗談だったと明かす時には、「まあ、冗談だけど」のように「まあ」をつけることがあります。では、冗談であることに相手が先に気づいてしまった後で、冗談だったと明かす時、次の言い方はそれぞれ自然でしょうか。

まあ、冗談だよ。

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

うん、冗談だよ。

1. 自然    2. やや自然    3. どちらとも言えない    4. やや不自然    5. 不自然

- 
- そう，冗談だよ。
- 1.自然    2.やや自然    3.どちらとも言えない    4.やや不自然    5.不自然

有難うございました。

最後に回答者様の情報をお教えてください

性別：――

職業：学生    社会人    その他

年齢：10代    20代    30代    40代    50代    60代